ヲ 9
4310
1

79
4310.
1

此峯ハ誤リナラン
蓬ナルベシ
川上不白ハ孤
峯ナリ

小堀遠江守　孤蓬庵宗甫

遠州流の祖古田織部正重勝門人也
名政一初作助　江州小室之郷一萬石を領ス後伏見奉行
を兼　春屋國師及澤庵　江月両禪師ニ參學ス　歸孤
峯庵宗甫　紫野孤蓬庵ヲ功德塲トス　又日轉合庵大
有子共云ノ　家光公ヘ（徳川三代征夷大將軍　歸大猷院殿）
茶事御師範ノ義　利休の茶三味ト武門ト時世の變遷
ニ因リテ大意違ヘる事もあるかち遠州茶道の
秀逸ニ因リ御師範ヲ撰まれ　ニも非ず諸人ハ
師と〳〵和融の道すき成〳〵得べき者を見立らき

たる由是に依り織部遠州共利休の本意と知悉し然る
上其を考へ武門の盛風を倣ひ事に多くふれり
正保四年二月六日卒 年六十九 孤蓬庵宇甫大有居士
子孫小堀和泉守寛政中有罪被没知行 天保元年
小堀梅之助 新知三百石にて被召出
茲に古田織部正の事少し曰
利休死後 家康公茶道の廢れん事を惜み世に名望の人
を擧げ 天下茶道の師範たらしめんと欲し 金森和泉守
古田織部正の両名を候補として評議あるに終に古田
織部正其撰に當れり 云々 既に織部系譜委しく云

○遠州 舟越石州ヲ世ニ三宗匠ト称ス
珠光紹鷗 利休 織部 遠州 世ニ五家ヲ五宗匠ト称ス

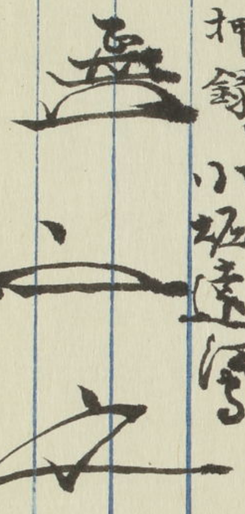
台徳院殿寛永五年九月廿五日茶に紫竹の茶杓もて
さんたるに慶長十七年十月八日於江戸古田織部亭に成
の所紫竹の自在を出さんたる事
筌蹄に曰 小堀遠江守政一
藤原姓小堀新助正次の男江州小室の郷一萬〇六百石
領す茶道を江月和尚に傳来る 江月八津田
宗及の子也 正保十年二月六日卒去 年六十九
傳集に曰
茶家雖不入宗匠の列 古田織部没後佐久間將監真勝
小堀遠江守政一大猷君被稱小堀遠江守諱政一從五位下小室

述作ニ出タリ
宗甫居士目近ク候故ヘ炭置給フ件枝炭釜ノ庵ニ分テ音ノスルヲ心竟トシテ釜ヲ懸ラレハヨシ
道具畳ノ上ニ窓ヲ明ラレナヘシ
右遠州好ニノ室ハ窓ヲ多ク明ケラレタリ云々

の郷一萬石ヲ領伏見城留主兼（伏見奉行又中ノ人ト云テ兄ノ屋敷アリ）織部モ伏見ノ屋
茶術ニ能ス終ニ為宗匠曾見春屋國師為俗等其後就澤庵江月等諸宗師ニ諸公案剃髪法名稱宗甫大有居士其年叔孤蓬庵于紫野正保四年二月六日卒年六十九
書画集覧ニ曰茶人部ニ
宗甫　小堀氏名政一遠江守世稱遠州流正保四年六十九
又書家部　定家流又松花堂モ初ハ此書風也
書画名家全傳ニ曰
小堀政一父ヲ正次ト云フ世々近江ニ住ル字ハ作助初ハ大ハ
豊臣氏ニ仕ヘ後家康公ノ臣ト成ル後剃髪シテ宗甫

伯樂（ハクラク）秦の穆公の臣下ト云フ馬を相ル

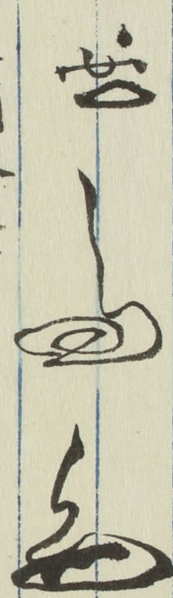
大有居士ト稱ス　和歌及ビ書画ヲ能クス　又挿花ノ法ヲ通ス　點茶ヲ古田重能（後ニ重勝）ニ學ビ其法ヲ熟得ス世ニ有名ナル遠州流ノ茶法ハ政一ノ始ムル處也
花押録ニ　小堀遠州



従五位下遠江守号宗甫又稱孤蓬ト　嗜茶禮風流雅趣冠于一世素ヨリ有識鑒之明和漢之名器品定于公猶驥馬於伯樂也蓋ニ古田重

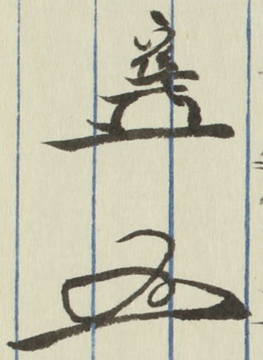
勝佐久間真勝小堀政一之三家為大猷君之師範
以正保四年二月六日卒ス歳六十九葬紫野孤蓬
庵

小堀政一初名八作助學于古田織部傳見前編



政一之門人左ヘ
徳川家光公從一位左大臣右近衛大將征夷大將軍
號大猷院殿贈正一位大相國慶安四年四月廿日薨年四十八
三代將軍政務ノ餘興探幽就畫ノ孝ヘリ

小堀大膳亮政一ノ男初政信後政俊後備中守ト成
る宗菴受茶法父ヘ從五位下大膳亮(大膳正)ニ正俊



小堀政尹權十郎政一の二男
蓬雪子元禄七年八月四日卒年七十陽光院蓬雪日淨
居士又花押録ヘ日遠江守政一次男權十郎号蓬雪ト

受茶法ヲ父ニ元録七年八月四日卒葬深川浄心寺ニ
陽光院殿蓬雪日静居士

茶道筌蹄ニ曰

浅井権十郎政尹　小堀遠州尊浅井家養子元禄七年甲
戌八月四日卒ス年七十
和漢書画集覧茶人ニ部ニ
政尹(マサ)ハ小堀宗甫二男稱浅井権十郎　一作正尹号蓬雪
古今書画名家全傳ニ曰

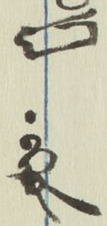
小堀政平　通稱ハ権十郎蓬雪ト号ス政一の次男書法ヲ
父ニ受け傍ら画を能くす　山水花鳥人物を能くす

小堀十左衛門　名政貴　政一の三男寶永元年六月廿三日卒
年六十六
花押録ニ曰遠江守政一ノ三男稱十左衛門茶法及ビ書道受ク
父　宝永元甲申六月六三日卒年六十六　本有宗兆居士

澤庵和尚　宗彭又冥之又竹叟住大徳寺又東海寺

正保二年十二月十一日寂年七十三

花押録ニ曰



澤庵諱宗彭別号冥之住于紫野大徳寺ニ

正保二年十二月十一日寂スヲ武州品川東海寺ニ年七十三

和漢書画集覧ニ澤庵名宗彭号冥之大徳寺又東海寺ニ住

又東海暮翁但州ノ人一凍紹滴法嗣大徳百五十三世ニシテ

東海寺の開山ト釜蹄ニモ出タリ

江月和尚宗玩欠伸子住大徳寺寛永廿八年寂年七十

釜蹄ニ曰

春屋宗円の嗣子ニ大徳百五十六世号欠伸子糟袋子ト

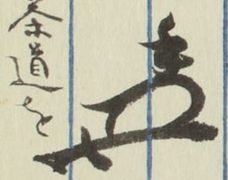
津田宗及の子本染興宗禅師寛永廿年癸未十月朔日

寂ス壽七十又和漢画書集覧ニ江月ハ名宗玩号糟袋子又欠

伸子泉州堺ノ人春屋法嗣年月日円上

花押録ニ曰諱ハ宗玩又称欠伸子住于大徳寺ニ年月日上

寂スヲ本山龍虎院



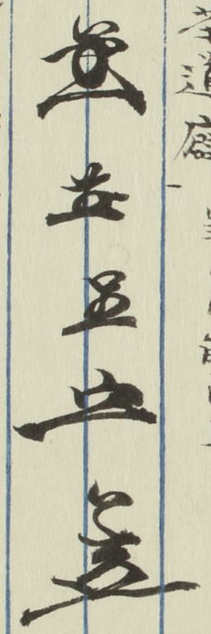
又釜蹄小堀遠江ハ茶道ヲ江月和尚ニシテ伝ヘ来リ

江月ハ宗及の子なりと出て来たれども何れが正しきかを
述作に曰江月和尚ハ宗及の忌之遠州流書もこれ書者歟
の伝受ハ江月なりしかるに後のちさるこれ誤り
なり休師改正の相伝の事ハ宗及にとるまじ江月
和尚伝受の物古の書もこれ又ハ関堀伝来歟奇乃統
系これ如し

龍本坊昭乗

中沼氏石清水社僧 初式部卿 號松花堂
惺々翁書法を近衛龍山公に學び又畫法を狩野山楽に
學び茶事善く寛永十六年九月十六日寂す年五十六

花押録に曰姓中沼氏石清水の社僧也称滝本坊又惺々翁
老後新に造交室顔(額ナラ)為松花堂尤善書畫
有茶道癖 年月歳日上



和漢書画集覧に曰
松花堂 名昭乗 姓中沼氏初式部卿と稱す後惺々翁と号す
八幡山滝本坊に住す書近衛龍山公に孝と遂に一家をなす
世に滝本流と云ハ是也又画を狩野山楽に學て亦一
家をなす松花堂ハ晩年の名也寛永十六年没す五十

六歳門人乗淳ヲ嗣トス　乗淳二代瀧本坊晩年書法変ス

古今書画名家全傳ニ曰前條月上畧ス南都一乗院の坊官

中沼左京の弟なり書體空海の筆法を修し自ら

一體をなせり名あり世に高く往ひ学ぶもの頗

る多し　亦山梨に学ぶ又和歌をよくす

又石蔵云八幡瀧本の茶室ハ小堀遠州の好有圃待合

此茶室の掾側に刀懸ヲ置く毛氈を丸くして座

に用ひしなり

此茶室ハ前條花押録云文室の事カ定メテ此茶室

なるべし　この考

花押録又曰八幡豊蔵坊孝乗法嗣。

恕、記ス　二代乗淳三代憲淳

釋信海

八幡山豊蔵坊孝乗法嗣名孝雄覺筝壹書法ヲ

松花堂に学ビ能狂歌元禄元年九月十三日寂

和漢書画集覧ニ信海名孝雄玉雲子（子八翁也）ト号ス豊蔵坊ト云

松花堂ノ高弟文狂歌ヨクス

又古今書画名家全傳ニ名孝雄玉虚ト号又子覺華堂等

の号あり八幡豊蔵坊の僧也小堀政一ニ就テ茶道を

學ビ松花堂に従ひて書画を学び狂歌を善くす

花押録ニ名孝雄有ニ玉雲子覺華堂等号嘗テ従松花

堂孝書法及ビ茶事共ニ有其名元禄元年九月十三日歿
又古今書画名家全傳ニハ部ヒシノ新出タリ
ハノ新ニ豊藏坊孝雄云々又好人ニテ狂歌モ能クシキ　牛菴
トモ

一

村田一齋　政一ノ臣茶道也
朽木伊豫守　丹波国福知山三万二千石
北鷺見平三郎　住京師号紫山
古筆了雪　乎澤氏了佐ノ男名重光剃髪シテ了雪

云　無心庵ト　延宝三年四月十七日卒歳六十四
花押録ニ曰古筆了雪了佐義子名重光剃髪シテ
号了雪延宝三年閏四月十四日没ス六十四法名無心庵古雪
道樸居士　茶道愛ニ于ト堀蓬雪

五

石菊云小堀蓬雪ハ政一ノ二男權十郎也政一ニ非ス
不可誤

上柳甫齋　吳服師彦兵衛　獨月菴松園堂
花押録ニ曰上柳甫齋京師ノ人稱彦兵衛　從テ遠列

愛ノ茶法

市南孫五

松平備前守 廣澤ト三茶入遠州銘所藏也 無事庵妙筆

狩野守信 采女 剃髪探幽齋法印ト叙 延宝三年十月七日 卒年七十三

花押録ニ号ニ弱冠采女ニ剃髪名探幽齋ニ叙ニ法印位ニ丹青ノ妙手也世人所知也 年月日歳月上

學ヲ茶法遠州ニ

探幽

茶道釜蹄ニ釜の部ニ

四方口元伯好元來天猫作底ヲヲゼしゐるとは鬼面

共蓋元伯好 探幽ハ仏ふ又足切浄味写

ゑは 破裂鐶自なり 千家ニハ鬼面を用ゐ

和漢書画集賢ニ ゑ作 初采女ト称ス探幽と号し

法印の位ニ叙ス 孝行の長子なり 丹ちの砂八世の父

ゑ示ニ 物和家のこたなるゝず 海内の画風此法

ゆ出でゝ一変ゝ今ニ至て其粉本を準的とす

守字

龍馬

年月某号前に用ひ

古人書画名家全傳に

狩野探幽孝信の長男名八守信幼名四郎二郎又孝女と云

後剃髪して探幽齋又白蓮子と号す宮内卿法印に叙

せらる四歳にして自ら筆を把りて紙に墨ずるを弥人と

習熟せるものてとしてもて後牧溪其他宋元の古迹

を追慕し又可翁及び雪舟の筆意を學び刻者厲精

遂に一大家と成る其畫巧妙なるを物

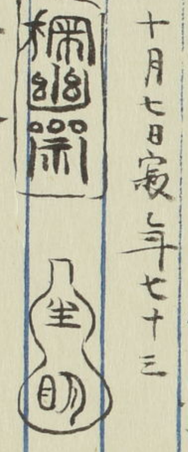
なし時人稱して畫傑となす寛文二年召に應じて

京師に出て太上天皇の聖容を寫す依りて筆峯大居

士の印を贈らる小堀宗甫に茶法を學び書又弘法の風

を慕ひて高野山の僧春深に學びて之を能くす延寶

二年十月七日寂年七十三



此餘數印アリ

茲に石菊云此白蓮子の印富士の形を以刻スルハ白蓮の

筆なる芙蓉峯を云フ又富士山を芙蓉峯と云ふも

依てのことなり

畫巧潛覽畫家新舊真偽雜記に曰掛物の部分に委シク

出スナリト茲に其外探幽齋の印ノミ云

探幽百馬百鶴圖巻物寫背

馬百三疋

鶴百二羽

馬方に延寶二甲寅年五月日

法印探幽守信行年七十三筆

鶴方に尾に探幽法眼守信筆印

中頃探幽子織屋に命じて別に一種の紙を作る其製殊に勝れたり世に是を探幽絹と云ふ（紙は唐の硬黄短簾毛邊宋の澄心堂白蘭鵞白藤白或は元の清江帋觀音紙明の連七奏本等を上とす）倭畫にて雪舟紙と云ふ則檀紙也はきの皮を以て漉く陸奥或は筑州より出るが今は山田道安と云人（和州福住人周文雪舟ヨリ学フ宋画ヲ法トス子孫家法ヲ傳テ三世同シ印ヲ用フ道安彫刻巧アリ今尚存する物アリ）高野山下の河根と云所にて畫の為に紙を漉せたり是し道安帋と云乃檀紙にて今薄帳に用ゆる故に拙なり云々

探幽の号人

兼葭堂雜録

南都春日神社の境内に古物の燈籠多くて拳て数ふるに暇あらず就中石燈籠にて八枝戸金燈炉に蟬の燈籠淺野侯の燈籠なり世人挙て見る処なり蓋し若宮御供所の傍に狩野探幽の寄附せし燈籠一基又狩野高信の寄附一基同所になくびて建てたり人物一覧云寛永十三年探幽齋任海所法眼云々又書畫一覧云守信初采女と称し探幽と号し法印の位ぶ叙せ拳の作（紹荀云久カゴ）の長子なり云々出て燈籠の銘に寛永十五年とあれば没期より三十五七

[illegible]
又慶安三年四月[illegible]
年四[illegible]出[illegible]

年[illegible]以前[illegible]り　尚信ハ初名一信（カシ）自適斎と号し　主馬と称ス
探幽の弟子にして又姓[illegible]名[illegible]
卒[illegible]と因書ハ見[illegible]り　燈籠ハ正保三年と鐫し[illegible]なれバ
死期[illegible]漸々四年以前[illegible]り　兄守信ハ[illegible]
嗚呼　定さる八世の[illegible]也　正保三年より今年安政四年
まで　二百余年ハ及べり　[illegible]
あれハ[illegible]

探幽之燈爐之圖　茲ニ畧ス

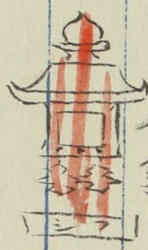
表ニ火ツクラ臺ニ上り藤ノ紋二ツアリ

高足ニ

寛永十九年

春日社奉寄進　狩野采女正藤原守信

惣高サ凡八尺計　寅三月吉日



尚信寄附之燈籠之圖　茲ニ畧ス

春日社奉寄進　狩野主馬藤原尚信（正保三年）

高サ凡七尺計　十二月吉日

土屋相模守

神尾備前守

伊丹屋宗不 住左海傳翁居宅の茶室政一の指圖と云

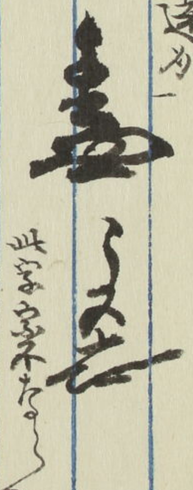
尤 江月澤庵玉舟玉堂の諸師と交る

釜蹄と堺の人と云傳ふ号寛永七年庚午九月十八日没六十五

又花押録に住泉州沙界に親炙す紫野 江月沢庵玉舟玉室

及ト堀政一に永井尚政等に居宅之數奇屋政一造之

又蹄傳翁学て遠州



此字宗不たる

逸に石翁云永井尚政に永井信濃守従四位下城州淀の城主祝髮

て信齋と呼茶の傳に古田織部の門下に出たれ共又茶道

釜蹄及ト花押録ト云来山左近或遠州ト云出たり係

釜蹄に云遠州門人

佐川田昌俊 又正俊ト書画集覧和歌の部に

通称喜六黙と壺翁臥輪子仕永井尚政 和歌連歌ヲ善ス

城州薪に住ス寛永廿年八月三日没

花押録に佐川田昌俊称喜六黙々壺翁臥輪の号アリ永井

尚政朝臣に仕年月日上 學て小堀遠州 兼テ能ス連歌

石菊日記

和漢書画集賢和歌の部ニ正俊トアリ

有點ニ翁壺齋臥輪子等モ城州藪ニ隠居ス

前條ニ云佐川田喜六は永井信濃守尚政城州淀の城主の家臣也

一ニ坂和田トモ又永井尚政剃髪シテ信齋ト云筌蹄ニハ京州人ト出タリ又花押録ニハ右近太夫直勝男也又治法ニハ左京太夫尚勝ノ男也ト有リ夫直勝ノ方ヨリ又花押録ニ茶法ヌ桑山左近或遠州ニ學ト出テ又治法ニハ古田織部門下ニ出タリ

是ハ宗和ニ遠州ニ

佐川田ト云特長穂ト云茶人あり

落穂　萬右齋門京作長穂ト云名物あり千家

石菊

茲ニ記ス天王寺屋トアルハ浪花天王寺屋五兵衛ノ子ナラン

筌蹄ニ高麗臺子元来ヲ舞物ノ事ナリ元伯ナリ特ニ

きるハ天王寺屋五兵衛所持元伯ニ付ノ後ニ一茶ニ出テ

所持ノ茶　遠州侯の茶の事

おりひて花穂ひろふときかまさを

花も田の面の面もこの面ものもと

此茶入ハ昌俊いづくにか拾ひ得タリ遠州モノ

是ニ戻リ唐衣ト云茶杓ト添テ遺セリ

云

江月和尚小堀宗甫両筆落穂茶入之記有リ

其時ノ老中堀田相模守所望ノ事又此時天王寺屋

慶子ニ似タル茶入所持遠州公ニ見セケルニ右五門の

作ナリ慶子銘ヲ乞フ細面ト名付給フ事何モ皆

たり
此下ニ文事定ト見ル功拙ツ
ゆるるの名有

茶器ノ一二ハ茶ニ

橋屋宗玄 通稱長兵衛

茶道及書法学テ遠州公ニ親近メ遠州公の預茶事

黒田正玄 初住洛陽後仕白川侯ノ茶道也

和漢書画集覧ニ法ヲ遠州侯ニ学フ嫡子正悦其子由悦

並仕藝著

黒田正圓

正玄ノ男 仕藝 白川侯茶道天和元卒

和漢書画集覧ニ正玄ノ次男以遠州流名アリ貞享元年没

京師ニ住ス

石菊ニ茶法ハ兄正悦トモニ父ニ受ク

花押録ニ曰

黒田正圓

受茶道於小堀遠州 動作活様 茶事 無枯槁之態

圓ニ常テ在テ衆坐ニ曰凡技藝平病トスル者壯ナル寸八則

雅麗老ル寸八則枯淡衆藝皆然リ諸友俱ニ議ス

我カ茶事過メリ花麗我竊ニ悅之聞人皆服ス焉ニ
以天和元年五月十二日卒一ニ貞享元年トモ

山田大有

大森漸齋

名秀祐通稱安右衛門住京師
号玉川漸齋ハ石川丈山ノ命名也漢學ハ六々山人ノ
門人也（六々山人丈山ノ子）嘗テ奉命ヲ自作の花筒を
靈元上皇ニ奉献ス宝永三年三月廿日卒八十二歳
（石菊云全ク黒田正玄ノ門ナラン遠州ト茶法ニアルハ誤リナラン）

和漢書画集覽ニ大森氏玉川号漸齋京師ノ人茶道ヲ黒田
正玄及正円ニ學フ嫡子扶信号百古齋孫有斐清岡齋等リ
古今書画名家全傳ニ
大森漸齋名秀祐小字安右エ門玉川ト号ス石川丈山ニ從テ
儒及書ヲ学ブ又黒田正玄ニ就テ茶道ヲ修ム年月日円上
花押録ニ大森漸齋住京師号玉川宝永三年三月十九日没又曰
名秀祐初ハ安右衛門号玉川住京師從テ石川丈山學昏
法及儒術丈山命ス漸齋ノ号曾テ奉テ命献ル所自作
柿花筒ヲ于靈元上皇ノ洞中ニ宝永三年三月廿日歳八十二
叔ス學フ茶法ヲ黒田正玄ニ

勸修寺高顯卿

權中納言 元文二年八月十八日薨 年四十三

花押錄ニ權中納言尹隆卿ノ男也權大納言從二位

博学メ有志操 学茶法ヲ大森杖信 年月日歳月上

倉光日向守

此餘小堀遠州派の茶人左ヘ

小堀門人上柳甫齋門ト云左ヘ

縣 宗智

江戸 玉泉子 享保六年六月廿七日卒 御庭方

松平左兵衛佐

高橋休閑ト御數寄屋頭 清水玄昌龍鱗齋

山口 宗也

石井治右衛門

林 道溪 十午庵当向又日繡

竹村鷺菴ト田中一圓齋ト瑞泉寺 浅ケ井墨庵

遠州門人黒田正玄門人

黒田正悦　正玄の長男仕藝列　浅野家
正悦の男に由悦アリ仕藝列

黒田正圓　前小堀門人ノ條に出ス

黒田正是　正圓の男仕白川侯

長尾仙鼠
初三輪弥右エ門陽若ニて七尾に改め仕白川侯

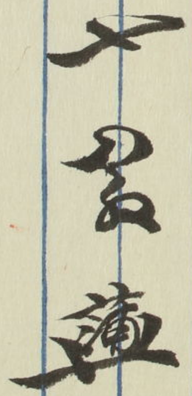
三輪弥右衛門仙鼠の男白川の臣
（石翁云白川侯トアル八奥列白川ノ子カ不分明

山田嘉兵衛

足立吾竹ニ平山良作寺村三真

同上門人山田大有門下

青木宗鳳　大坂ノ人号凡鳥又紫雪菴水蒲又一統子
等ノ号アリ　明和二年十二月乙酉年七十六
花押録に浪華住雑髪後名凡鳥号紫雪菴水蒲一統子
明和三年酉冬没年七十六



二世　青木宗鳳　凡鳥ノ男初宗舒新柳軒又温故
斎　寛永五年七月没年六十四（寛政ノ誤

花押録、二世宗鳳 云々前同 寛政五年丑秋初トアリ

青木宗鳳 三世

諱軒号斎号不知尤継続モ如何併シ亀山の

本宗寺より幼年贈り名宗匠家、青木宗鳳ハ

遠州流大阪宗匠ト出タリ

同上門人大森漸門下、

大森杖信 漸斎の男名重建通稱太右衛門

甘古斎 禎翁 宝暦六年十一月没年八十八

禎 サイワイ メシヨシ

頑 カタクナ ニブシ キロカ

花押録、大森杖信漸斎男名重建初ハ称太右衛門

號甘古斎 頑翁 宝暦六年十一月廿九日没年四上

甘古斎杖信

大森有斐 杖信男名重厚清閑斎 天明六年

十一月十七日没年六十四

花押録、月上但十二月廿七日トアリ

石菊死枯の二軸ゝ此文ゝ日 老て光明るゝ雪のゝきれゝ

風ゝゝゝゝゝ雪のゝ佐免ゝゝゝ只 炉辺の[illegible]

[illegible] 木兎のもの [illegible]

人物

重厚の印

[illegible]

林義牧 忠左衛門号紙帳庵 小堀ノ臣寛政十年正月三日卒

花押録、称忠左門、小堀氏税府吏退隠シテ号紙帳庵

受法ヲ枝信（茲ニ因テ考フルニ枝信ニ受ノ方本途カ

大木林禮三有斐ノ男新如庵鳴斎四世ニシテ茶法ヲ父重厚ニ受ク

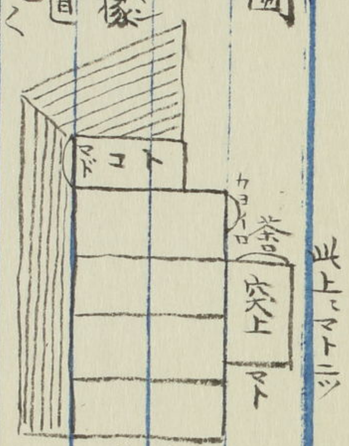
三種ハ
松本珠数ヨリ
古市播戸ヘ傳フ
後播戸ヨリ
松屋ヘ伝ヘタスト
トモ云

是〳〵小堀遠州侯遺稿ヲ顯ス

茶道雜録ニ出テタル事

此雜録ハ寫本ニテ南都の松屋後代ニ寫〳〵ヨタル
ヨノヨ〳〵此本ニ、珠光の終松本肩衝春屋盆此
三種の名物ハ東山慈照院殿市場村田珠光拝領
の後古市播磨法印澄瀧ニ附屬ス播戸後〳〵
我先祖久竹ハ相伝是ヲ數代也トあり
因ニ云南都松屋古川孫三郎方ハ久重又久政トモ出テた
り故久竹ハ伝ハ此の頃ヨリ

八幡龍本坊之圖　小堀遠州作好



無事庵石菊云此道ヲ
是の上窓ヲ〳〵ヨタ
ハ遠州公ハ近眼ヨタ
ヨ

畧圖

待合此據
ヲ懸置
種ヲ丸く
〳〵ヨタ屋ニ用フ

瀬戸茶入　元祖藤四郎　加藤四郎右衛門ト云ヲ畧
〳〵藤四郎ト云說有尾別瀬戸焼也
石菊云茶盞ヲ云ヒ瀬戸物ヲヲ云ヒ伝ヨタ
此ヲ云ヒ
京都樂吉左衛門の暖簾ヨタ
本阿弥光悦の筆ヨタ〳〵ヨタ〳〵ヨタ

中古物ト云
金花山三代
藤四郎

真中物
二代藤四郎

サイ
砦 世字
キノカミ
カサヌル

又清水焼をさしてすみとゝいふなり

小堀遠州侯宗甫　藤四郎作の勝たる茶入を撰

藤浪　飛鳥川　玉柏　金花山等の名物を金花山

とゝは奥州金花山の形に似たるを名とす真

中興物と云　砦物も似たるを藤浪手　玉柏手と云也

上品の茶入は都て古瀬戸也　伊賀信楽　薩摩手

備前等茶入有之ト雖モ名物稀なり　江州瀬々焼ハ

宗甫公謂所にて窯を立て焼あるなり　飴色薬

るゆゑれを上品あり

古瀬戸辰の市　小堀遠州公所持大和國辰の市と

ト里より出るゆゑキヤシヤ人唐糸色石目

口掛りにて下薬枕足〜上薬足も〜掛り

るかれを

飛鳥川　元禄迄凡二百九十年

小堀遠州公若年の時和泉堺にて初て見るふ時はま

〻茶入も若かりしも其後伏見にて見給ふ時は

まるさに古くなる事　諸々流てきき自日

なりて

きのふ〜ハ〜ふも〜〜〜〜飛鳥川流てきき

き自日なりわ

[illegible]

流れて[illegible]

箕山 寛永の頃迄凡百二三十年

遠州公數多[illegible]見のふ中も絶たれば

箕山はまき[illegible]

二ツ三ツ四ツ

大概こ西[illegible]のものかゝきハ甘[illegible]山のこの

雪の下 一ニ雪柳トモ古類戸トモ

遠州公家臣村瀬氏所持柳の枝も雪の降りて

積[illegible]る[illegible]名を春慶作也

かつゝきや[illegible]雪もふる柳

よゝ月八[illegible]の[illegible]

橋姫 元禄迄凡二百十年

遠州公浜持 藤四郎作

さむ[illegible]夜かゝ[illegible]き今宵も

我をよつらんもつのを[illegible] 姫

[illegible]

[illegible]感[illegible]遠州公我を待らんとふ

[illegible]

玉柏 元禄マテ凡二百三三十年

遠州公秘蔵是いなと尾弥兵衛と云ものの摂津国新屋
の浦にて取たり　古歌にて名付給ふ
難波潟の藻を埋とて玉柏
別をしらす人の恋のや　戀
落穂
小堀門　永井信濃守家来　坂和田（一説佐川田作）氏所持
遠州古歌を以て名付給ふ
お俗にて落穂ひろふとやらんは
稲の田面を刈さきの事
柳子　遠州長関東下り給ふ時小家の棚みる
と者〳〵駕と留給ひて求メらる
道野辺迄落の流れ柳陰
志ほ〳〵と社立留り給ふ
青江子　元禄ミテ九百六七十年
遠州長家来勝田氏所持にて遠州（上りなれは
ゆ給ふ）子長青江の結構を賞し依て世に
青江子と云
廣澤　松平備中守殿所持
遠州長筒様の茶入今まで見る人毎に云心と古の
もの　廣沢の池の面を見る毎に見る人も

むし秋の夜の月
利休袋切　木綿耶鄲　一漢東　廣東　漢島
織部〃　梅鉢ノ段子
遠州〃　牡丹唐艸段子
以上　雑録
述作に小堀宗甫翁の筆なるを爰に記す（余トアルハ石翁ニ非ズ）
或人問　答ていへるに茶子乃傳授と云ハなくて大切なる
なり　数寄道の心乃上にて取可き傳授なる茶子をも
式正の茶子と云之此茶子書面にて傳ふる事なれ所而して
数寄傳授書統系先師より傳来ハ有楽翁　宗甫翁

茶ノ字
追善目さまし
草
茶を目はまし
まとふ異名
未考心を目はまし
しまとふ詠し
たる歌

宗旦紹智ともなし傳授なき人傳受せさる人をも論し
て目をも覚さんとハ不審　余が傳来なハ一通相傳といふ書あ
り是ハ一休和尚珠光休心法師参禅の上数寄の道をも開悟
して数寄の文字を改たる事なして（珠光数寄ヲ奇ト改メテ関
師ケ條アリ）同巻の書之先師ハ右の書の条目を以て平素同巻せる
きし此一通相傳し書は別清水動閑の自筆又宗関居士自筆
にて上包に一通相傳之事但請益ノ書ト云ふと書記しおかれた
り則余が家に傳来せり　花筒ノ傳茶杓乃傳表具の傳あれ
と皆それぞれ人あって傳れ来りしにハ何れもあ傳の書をも得るハ
傳受したりとは見て数寄の心をハ謂かくかるへし　一流の

山里の暁とての
松風や
目はましくさ
乃孫とぞなりけん
本艸木部に
今人少睡ト茶
ノ條に出タリ
茶勲ハ除雪煩
滞一滌醒破
睡云々
睡を少をる
諸書にもみられ
ハ茶の異文を

評論する書物なれハ
月覚帖と名
付られたるし
草ハ草紙又
草稿の意也

きすてゝ云て不作し調て茶碗花瓶等たとへ
ハ吉野の寺子屋ハ其の寺子屋ハ其の寺子屋
し七賢〻碁子又ハ九路の碁子と云名目ハ其侍〻て九路の碁子
をなるし極めたる人し常〻碁盤を前〻て式正をみるを大切乃所
法也是〻他流の碁子の書を見て正作或いかさま様作法
丈筆四角たるとの類〻き侍ず其のを〻を書記をなれたり
上七路中七路下八路の碁子のを遺列自筆を以て書記
なるを書写〻仕て其世出るをもみるべきや
碁盤のひら〻文字たゞ書記〻たりとも書面の外言
葉なるを〻〻他流の書を以て侍る乃碁盤と見

嵯峨天竜寺
塔頭真乗院
三斎翁茶室
大月ノ上屋根ウラ
ヘツキ上ケ窓アリ
此窓遠州三斎
翁共拙アリ

れるハいふ〻無る碁子のをハ名なれハ印一の其名
の紙ハ思ふ〻し左へ花をとも其書を以て他流の事
とを其通のをハいふれば〻きの遠州一流のをハ
なるなり〻
道具畳の上を屋根〻〻みたる事 好ものを事 之頭書
ハいる〻〻宗甫居士の好この座敷ハ屋根〻を道
具畳の上ハ〻つ〻ひたる多〻 八幡の瀧本坊乃小茶室
たる〻畳乃上屋根〻〻みて つを上り窓あり 金ハ〻る
るあり 宗甫乃生目 近〻て炭を置 炭を置 炭
釜乃底ハ付て 言のをるを心覚〻て 釜を置

石菊云
南禪寺三畳
大目遠州好
大臣雛形ニ圖
アリ

フメ置ケ
唐物青磁染
付ミモ節ヲ割タル
形アリ
染付ハ遠州ノ好
ミテ南京形ヲ
ツカサレタルト云説
アリ余モ先年
所持ス

らくとして茶甘説の通りなるべし道を尋ねの上
又窓を明るるなるべし（）右遠州ぬしの庵室は
窓を多くなりたり伏見の小庵室は自分の好
に滝本坊の書院小座敷に自己のこしらせし物をきかるる
庵室の上に窓を付られ（）掛るべし先道を尋
の上を天井直ちよ（）
古織八休兵士乃茶の作様乃内の二人ハ遠州ハ古織の弟
なれども茶の作様（）別なれども一味と名づ（）
古織の同意乃書を見るに海切の作意なり高麗の
鉢（）高麗物の茶碗乃書記を見るに休兵

士の茶作ハ遠州（）第五代茶の作様なり少庵
も茶の作様（）宗旦一流を立られ（）古織の
茶を以て宗旦息宗休に教られ（）茶なり古織の
休所乃名目を且翁和尚と書記を
られ我意を以て答られたるなり（）遠州
へ遠州を古織の同弟せ（）たるなり休所乃作茶
乃（）なり且翁て一回の論ありたり遠州ときを
ときし知るの大なる知りるとかるべ（）知過必改又
不知を不知とせよ又三人行ハ必吾師なりと同志のなれ
こそ有るべ（）けを利休も古織の發明に随られたる

遠州ハ古織ノ門弟ノ解説

紹智先祖モ利休師没後古織ニ相談セラレシメリ然ル何しモ数寄伝授ハナシ諸流ヲ見聞スル迄古来手灯籠ノ説ナシ往昔ハ手トウロウト云カゴノ花入名物ハアリシ云々

る多〳〵又門弟の中に名あるの上法を受られ〳〵るとも利休没後宗旦先達の教授を今用る事も多〳〵古々いさゝの教授なきさうもなく既死れとも遠州の宗旦とも数寄伝授なりとい〳〵とも一生涯茶事ハ任〳〵たる茶人也宗甫翁金甫居士没後喜多子乃法を受の門弟なるもれ後ろ茶器の銘たゞく多くハ和尚の心を茶を以て名付られ〳〵今ハ名物となりて世上ハ伝ふ宗旦ハ一家の流風を立て金さゝ(ゆゑ)ハ茶の用ハ海と学られたり旦老人古実習ハ茶人共古人を見乃ひ跡ハ千氏の家嗣たれハ近世と八格別の

変也世茶と家風を茶ふれ是皆休居士の徳ゆゑ近世旦翁乃茶法ハ遠たるハめゆゑ珠光法師の古義休居士一用居士の伝受たりとい〳〵光師乃心ハ他〳〵の教ハ乃習ふ全く珠光法師の古義を用ひ路師の伝受を捨らんとする歌いふハ路師乃手本ハ乃上ハ遠ざる事を嘆〳〵さるを補て改正せられ〳〵る茶法休居士ハ古義ハ一尺八寸の丸畳炉義ハ〳〵と一用居士一尺四寸と物ゆゑ休居士是ハ陪し一人ハ〳〵遠られ柄杓も音ハつき通〳〵なりと月形と物ゆゑたる形ハ古義とて一尺八寸の丸イロリ又

つき通しの物なりと用ひ文や作れの上茶乃仮板のうへ
なども改正の法もおのづからあらはるべし
休居士ハ茶入の袋切みかんとうと人さを好まれたるとは
古来乃習ひをのゆ道らんこうるゆ和漢乃茶別
なく新しき茶入仕系使傾茶の新又茶入ゆ多り新
なりと系ゐたるとき古代袋切乃文人ゆせハなる事
遠州ハ古金襴ものるまれたるとも一概の説
宗甫翁古金襴服子ゆ古きを切を裏の手鑑
なと物もきたるゆめて 休所宗の名物名を
所とる切も多し 宗甫ゆ宗の名

を付近世ゆ系数多ゆ有り仕るゆ仮衛ゆ有ゆ
うるの多しと云ふもたし
古織乃茶杓のれたゆとハゆの遠州なるゆ此れたゆ古人
乃茶杓ゆもるるるまれと遠ゆハれたゆ一板を写
遠州公のゆ釜蓋ゆ人えたり
申うるも数人ゆやられて申うるる
まれをすく形ゆ什れをて乃を
又云 ありたゆすくはぐるるいのはかり
遠州七先乃孫ゆハ伊乃文ゆ世上乃をて形

ふ事肉乃人ハとハいふ〻世上ゆとて有けるくふ事肉乃
人の
遠州宗旦乃文る紙の角冥〻ことの多〻　古人云数寄の
者ハ改を消をやうゆ心無〻〻　文字も用向のゆ為
と書し自然とそ角とそ角ゆ無のの角もよく和の寄の
好美風雅なる数寄のみのたる文ハ大切ゆまぐ〻　見て
撰て表をとを為そ角る之設度相用ゆ〻き杯ゆと
心をとるハ数寄共の心なく〻けるとそ〻　ゆ仕書甘〻
治を付名乎たて見ハ角ゆ為ゆ新意を加へ
たくゆみ雅興を偲ひ事　数寄侍度もなく半途

ゆ〻て新意を加ふるゆ也て節かる事〻

名家茶人遺稿録　小堀遠州寄

宗甫諱ハ政一遠江守　従五位下　茶ヲ好ミ物好キニ長ジテ
古田織部没後茶家ノ一派ニ似タリ　利休織部ノ風ヲ
一変シテ器軸ヲ撰ビ飛鳥川青江王相廣沢辰市
其外品々ノ茶入ヲ取立責翫セラル今世ノ知ル處也
茶杓の筒ニ書付玉ふ　小堀宗甫翁
ゆかりする人ゆ任せてゆゆむなり是て
すくるる世のちゝろよ

きのふ〜云ひくらす暮してあるこの三
あり礼てあき月かなりけり

玉柏

紅葉庭に藻ぬるもくるを柏あ敷りをて
しりくのたひめゆ

廣沢

廣沢の池の面ゆ身をなしてみるくんも
あき秋の夜光月

橋姫

さむ〜しらみ衣かさしき今宵もゆ

我をおほう〜宇治の橋姫

音羽

音羽山おく〜みゆつ〜音坂の関のさるたゆ
年はふきとも

芦山

芦山のちるかくもの遅さくらあらんはれ
て見る二ツ三ツ四ツ
二ツゆ割きて井戸茶碗を接せて宰相前
おりきて二ツゆ音りり〜井戸茶碗
うる〜で接ひてくあてを下一

伊勢簾　是ハ軒ニ用ふるすゝれも非す茶入の銘

ゆゝしき古瀬戸

あるふるさとを来たらはあるいよをたれ

いとゝ我を徒さらるかな

以上

茶道筌蹄諸家茶人の部ニ

小堀遠江守政一藤原姓小堀新助正次の男江州小室の人

一万六百石ヲ領す茶道ヲ江月和尚ヨリ傳来ス江月ハ宗及ノ

男也　政一正保十年二月六日卒去年六十九トアリ十年ハ誤

リナラン四年ナルベシ

茶入袋切透別

花色紋色かるたり石畳の中ゆ花輪違ひ又窰あ

ゝ大石畳白浮紋獅子紋子　文化ヨリ二百年餘

以上

點茶法總論茶道法式中ニ

徳川將軍代々茶事を用ゐられ初代家康公利休ゆ法を

問ほれ〳〵ものゝ如〳〵但〳〵紹鷗利休時代師傳知レサル中ニ

アリ　二代秀忠公ハ古田織部正　三代家光公ハ小堀遠江

守　四代家綱公ハ片桐石見守之れが足利家以来織田豊臣

徳川引ツゝき茶道ヲ以テ燕會ノ禮ニ用ヒタルヨリ大小諸侯

亦茶事ヲ嗜シテ互相朋友ノ親睦ヨリ正邪智鈍ヲ鑑識スル
ノ機具ト為セリ

茶書本旨

小堀遠州の壁書に曰く夫れ茶湯の道迚も外面はなく君父ゝ忠孝を盡し家々の業を懈怠せず殊に朋友の交りを失ふ事勿れ春ハ霞夏ハ青葉がくれの時鳥秋はいとゞ淋しさ増る夕べの空冬ハ雪の曉孰つも茶湯の風情ぞかし道具迚さして寄ス可らず珍らしき名物迚も其音ハ新しく只家に久しく傳はりたる道具こそ名物ぞかし古き迚も形いやしきを用ひず雖しき迚も形のよろしきは捨べかゝ故多きを羨やむ可らず少きを厭はゞ一品の道を守らしも樂後も持囃してそ末々子孫に傳ふる道もする可き一飯を進む迚も志薄きを早瀬の鮎水底の魚迚も味ひを可らず籬の露山路の蕨かつゝ明ケ暮を來ぬ人とまつの葉風の釜の音絶ある事なふるべし

節儉ハ洋ノ東西を論せず古來賢哲ノ尊ブ處茶道に於テハ最モ之レヲ尊ブ一トシ貴人ト雖モ驕ヲ慢ヒ奢ヲ厨ハスガ如キハ決シテ取ラザル處也貴賤ノ地位ニ應ジ而カモ其八分ヲ起

ヘズ上中下流各其境界ニ隨テ楽ムヲ此道ノ要トセリ
茶事ニ表裏ナシトハ酒食菓餅ノ調製仕成ニ座敷勝手同一
樣只管清浄（無垢）潔白ナルヲ云フ也 通常ノ交會ヲ見ルニ座敷
ニ於テハ美麗清潔ノ觀アルモ勝手臺所ニ就テ見ルヿ或ハ潔
ヨカラザル處ナキヲ保シ難シ茶事ニ於テハ此ノ表裡ヲ戒シメ
慎シミ清浄神ニ供スルガ如クナルヲ以テ本旨トス

茶湯流伝集遠州

數寄屋ニテ扇ヲ遣ハク皆用ヒ方ニ丁寧ニ骨二ツ三ツ程先
ニテ遣ふべし 皆用ヒ方ニ慮外也
客中潜りヲ入るに足の踏込ニ樣表ヲ受テ入るヲ習ト
す 露地ハ氣ヲ附け樣砂ニ箒目などヲ付たる上ヲ踏
ム事悪し 飛石の上ヲ踏べし 石燈籠ハ傍ヘ寄テ見
ざるもの也 遠目ニ見るガ能キ也 遠山ヲ受たる露地は
必其景ヲ貴スべし 類などヲ掛りあるヲ心附べし 不
知迎其侭ニ見やるハ悪し 人ニ向テ礼ニハなるさる也
雪隱ハ古くとも存露地ニ在るハ無差ト居ラざるもの也
外ニあるハ雪隱新しくとも居る也 又植込ニの中ニある茅や
菁雪隱ヲ莊り物故ハ居る事なし
遠州六宗匠得
惣テ茶湯ニハ靴足袋草履ハ事なし 刀掛ニ扇抜

て置也（冬）夏ハ暑き故手に持てゐる也 主人席供の者ハ扇
打タざる也 刀掛に向ひ刀を抜き掛置脇差扇子も掛て
隣上りの戸を三度に明け先ツ内の様子を見て内へ入り向き
迄り筆を下に居て履物ヲけこみの板に持たせ掛け云々
懸物ハ三尺程此方に居て美緒ハ何方にあると見上
ル目を付け風帯ヲ見て中一文字を見下し 繪なれハ
絵に墨跡なれハ墨跡を見るなり 偖下一文字中軸
を見て 堅物ハ下ヲ見て能く見て立也 横物ハ下ヲ見起て
一目見る （石菊云此見様如何

遠州六宗匠傳記 炉炭置

亭主炭を持出テ莊る也釜を撮羽帚にて炉縁を掃き寄て
炭の流れを見る也炭する中色々讃様むつかしき習多し
炭置仕舞香合蓋する時香合物出候へと云亭主亭下す
ると強て乞先ツ中座に置相客へ辭宜を云偖テ下に据て
見る也次に渡し次第に見廻し 上座へ返す事なり
し仕舞釜の蓋を取に出る時かなを是の真中に置也亭主
取る時禮をする なり
流傳生花を見るには能く花葉の數を覺めぐし 必ず人の

同ふもの也

六宗匠傳記　中立の時道幸に壯あるゝ故先ッ風炉先の方を明ケ内を見遷て前の戸を明ケ内を見見て跡戸を建る也

花も三尺程退て見る也花の蠟えんを能ク見て立ツ也

掛花入も見様同〻手を突事なし。釣花ハ朝出舟ゥ

ハ入舟能見て立て一目見るなり

遠州流傳集

濃茶ハ三人目にて帛を外し上座の方へ出し置き上座取

りかぎ畳の眞中へ返す也。下座飲切茶碗上座持て

行き上座ハ夫〻に御膳可被成〻候〻茶碗取りて

先ッ息を聞下に置て茶盌明りの方を受けて見中座へ

廻す中座下座息の風様見様替る事なし下座炉縁

へ寄り載て下に置き返す。濃茶飲み茶盌廻し飲ム

ハ悪し但し下座ハ茶の服を能くせん爲に廻す也

。茶入を見る時ハ先ッ懐紙を取り出し手をすきと拭ヒ

両膝を下る所ゟ先ッ茶入の蓋を取内の茶の有り加

減を見る子細ハ俯向け茶のこぼるゝ事なきやと云フ

事を知る爲也偖テ蓋の内張の處に氣を附る偖テ蓋

をして人差し指にて押へ右にて取廻し見る也茶入ヲ

四方に高く揚るゝ大なる不躾なり茶杓出テたるハ

先ッ帛紗貸〜可被下と云ヒ亭主出すに帛紗を四方〜〜
と茶杓を載せ是も下へ手を突き見る也下座上座茶巾
茶杓袋持来る時受取かぎ畳の内勝手の方へ寄セ真中
ゟ帛紗に茶杓を載せ置き左の方に茶入右の方に袋置き返て
也○茶杓其外の器を見る目利立て悪〜目鏡を掛る
悪〜器の疵を繕ひ置く事もある故主も是を嫌ふ也
又茶入の難や疵などの物語すべかゝす第一の嗜也
六宗匠茶椀持出テ居住居〜何きも御乎座ゟ御座
候へと云に御手前も用ゐるくゝゟ侍候へと云ふ
借テ手前となり茶出る亭主帛紗畳に直すに上客下座に

向ひ御茶支しからと云ふ借テ出る内御手前すると云ふ
帛紗右ゟ取り左の方に据へ右ゟ茶椀取り載せ戴て
能き程に飯に次座へ悦巾添なゝ渡す也左の手ゟ能也
次座右ゟ取次座ゟ三人目ゟ悦巾外して下に置下座
へ渡す也借テ帛紗取場ヶ上座の前に置き上座取り最前の處に
置く也亭主取釜の蓋取る也借テ茶盌下座ゟ上座の前へ
持来る〜〜手付辞宜あり茶盌息をゆ下に据て茶の
服を見る人茶を見る〜〜借テ次座へ渡〜服を見る
手前釜の水を入し場杓下ゟ水を付杓(茶入)景前出
〜たる所ゟ立ゟ亭主取服を見息をゆ〜と客

服ヲ見タノシム

何もし禮すると亭を用く禮すると何し納め茶布巾茶
うんの内拭きたる時氣を附茶布巾蓋一上るを待納めしと云ふ
亭を辭宜あり客強て留メたる時收むる也
○亭を手前頼度と云時辭退すもしも達て望まる時
手前する也亭取り腰に挾み水覆持出る常の通り也
相客へ向ひ御茶一の御辭宜をし候半すれ共疑きし所
ろくと所座作はんかと云上座挨拶す茶のを引下け茶筅
は上へ揚け置也亭を見て左様に所云扱成作茶
へうそは無き由挨拶する亭茶の蓋炉開掛て置
也茶釜打も成程舞する云々

今る何もし所出て附口切仕る待茶の日無心元たると云
強くうかゝ試度よ云ふ所こうそ又一口飲て待
て外きあゝ強念とたる此時ハ上座茶留を乞出る也
竹井道甫茶記炭所形式
流傳（茶湯流儀集遠列）
亭を世上に無差乞也道々を乞ふと亭主一對して
挨拶也と雖し新〻き事なゞ乞事却て気振になるぬ
所に見るなる古き事の時ハ利休事なる時代物なる
やと問と古き由挨拶あれ乞見る也
○亭主茶人等取に出たる時之刻の間炭所殘多候間今一度

拝見仕度と云フ亭主辭すること強て望む且祝の義なり
候へばと云フ也
遠州六宗匠暫クあり羽帚持出て大目内拂ふ也是ハ
歸まゝの事也此時先程の御炭殘多存候間今一炭拜
見致度と云亭主時宜あり強て乎望する時炭入持出
炭すゝる也炭齋くゝ釜の沸音附する時今る八種こ忝〳〵
禮を述立ツ也借テ床へ向ひ名殘を見て躙上り掛り
右の通に庭へ出庭の景色を能を見る想て勝るの格好
氣遣ある所入様なも中立なも不見歸る時能こ見る也
口傳云々

流儀立炭を望ミ亭主之を爲〳〵たる時八釜の沸音
の所たらの時云沸音のなきこ立事なり
六宗匠傳
茶湯より歸り直こ禮こ行事アリ又心易き方へハ書中
ヲ以申入る事アリ其状こ御茶被下忝殊こ珍製御道
具拜見仕近年ノ慰仕度ト書べし。茶ノ湯千前ナトこ
珍シキ會釈ナトアラハ珍シキ市茶ノ湯こ逢イ一入忝奉存
候ナト書べシ。又益ち点袋茶碗臺天目ナトこハ結構成
御會釈一入忝奉存候ト書べシ其ノ人茶ノ湯功者カ
近頃ヨリノ稽古ナトヽ聞カハ御千前敬馬入由書遣シテ能

キナリ

風爐の炭する時ハ見ズ香合ニ乞ハズ火炭ニ移りたる代
を先一寄て見る見様ハ風炉ハふくさ反故崩し易シ依テ
臺目の点ニ一叫ニ分ケすり込ム歸る代シ同然

六宗匠　夜會客振イロリ

腰懸ニ行燈アリ上座ノ人持ッテ行キ引續テ中座下座モ
行ク也借テ行燈ヲ刀掛ノ下ノ踏石ノ脇石ニ置キ勝
手ヨリ取入ハ事モアリ其儘モ有如此代ハ中立ニ持ッテ
又腰懸ヘ行也○路地ヘ手燭出シ置モアリ其時異奇
屋ニ火ナクハ持ッテ入モ能ニ數奇屋ヘ入テ先ッ手燭取
床ノ内ヲ見次ニ臺目ヘ行棚ノ荘ヲ見下ニ置キ下ノ荘ヲ見
炉中モ見テ借テ中柱ノ前ニ置キ置合セ見ル代中柱ト水
指ノ間ニ置ク但シ蠟燭ノ煙棚ヘ附カサル様ニ心得ベシ
（石菊云客一人ノ时の所作ナラン）
手前ノ代圍炉裏ノ隆中柱ノ隆ニ置也茶碗拭ヒ茶巾ノ
ヲ〆メテ水指ニ置キ〆ル代手燭出ス也亭主取ル也後茶碗
出ニ〆ル代火ヲ御貸候ヘト云亭主出ス也置所ニ置キテ内ヲ
見ル也

六宗匠　高貴御茶會客振

外露地ヲ待揃居る時貴人潜り内明ケ被成是ヘ皆通

るべき由申意たり何もも下へ居り土に手を突き謹て申
禮ト上る貴人申入被成るを上座より段に潜りを入り
貴人申城被成候時ハ上座一人敷居に手ヲ突き戴きて
入るなり内へ入候てハ常に替る事なし
香合見度時も相客を見合謹て居る対貴人申心附カ
し申出し也備懐石の時自然膳など申自身申持出
の甘ハ少し前へ出て中みて取るる能き也其外も皆此
心得たるべし　茶の時ハ皆謹て居る也御茶出ったる
時も頭を下け戴き起き上り飯也茶碗見て常の処
に置き申茶盌御取被成る時御禮ト上て頭を

下け後て居て初の濃き申拾て被直柄杓釜に掛り柄
杓の柄下に到る時頭を揚るなり依て茶入見度時も
何も目遣ひして居るなり申氣附かれ茶入見度カ
ト申意なて申出し候ハゞ謹て拾ひして区々通ス
其中貴人申入り也能き時ら茶道出る其時上座
御前能き様被仰上被下と云何れも禮する又炭斗
申移出被成幸もを何きも起ツ也御勝手へ寄り申近
習なを又申禮ト之仮りに為り又申礼に上る也
遠列六宗匠貴高相伴
貴人高位の次座ハ少し退きて居る者也主人御供の時ハ諸事に氣を

陪る處第一也主人御膳の辺を通らぬ様を見ず謹て居
る事〻 千水に而立あらば御先へ出て御草履を直す
べし〻 而あるに掛けて上る我に八下に飛て遣ふ也為る
に回数 躙り上りを而入の時に而草履ハ二番座ノ役也
六宗匠炭所望の法第
亭主出て而勧めに一炭可被成と云ハ系有候併し而
亭様に而炭拵見然たる〻云事を是非と云ハ
左様なる〻而金二の位場より〻云亭を而席
を敬よ〻〻云ふ為方なきかき墨〻〻り帛巾腰
五徳に炭入持臺月〻入〻 かぎ墨に炭入置き其後亭

茶書地に千家流に八掛物ト花ト初メ一度ニテ後入ハ素床ニスルモ面白シ
又掛物丈ケハズシ花計殘スモヨシ
又掛物カ花カ一品セント思フ片掛物ハ除キテ花ハアルガヨシ

主に同事 自然亭主の置き名臺炭未〻半分計り殘り
あ〻ば脇のちり〻を能く清〻丈を用て炭すべし
又向に臺を置く事に而あり 薫物に而入被成候へと云フ
ぬ八入る其品多〻
以上の説所望ハ主人〻〻為スとのやとす
六宗匠 座敷
侘人主人の時度々十入したる客に掛物珍〻から手と思ハば
振舞前に花計〻入れて茶の時に床ハ無床也
遠列流傳 主法第 迎入
亭主客の揃ふを腰魚の物見の窓〻り見霞地の帰陰杯

見世〜咳拂（セキ）と二ツ三ツして中潜明ケ石ノ上ニ居中潜ノ敷
居ニ手ヲ突キ○其潜リヲ明ケ客ニ裡付草履ヲ直し
下へ下りて待ツ是モ互ノ位ニ依り一先ツ禮を爲ス今日
行をし丹出て呑く是と一特通り徹成候〜と云と懷中
〜手巾ヲ取出〜潜りの類（ルイ）迄拭ひ戸もと立寄セ
客の入程と〜〜置ク此時迎と〜三ツの習あり位ニ依り
て中〜〜りの外の石へ出て〜〜高位の客なれハ影
向の石迄出て〜〜

流傳 主方 初座入

亭主ハ茶道口の内を大刷帚ニテ掃キ咳拂と一ツ二ツニテ

戸ヲ明ケ大目ノ内へスリ入リ黙禮（モク）ヲスル也客ニ同事也亭主時
ノ出ニナドニテ其中ニ客方ヨリ花を貰ふ數寄屋の番請
物（ムキ）を受ふるもし拵ふる

流傳 憶石 主法篇

湯盆ニ湯次水次こが〜入持出る○正式ノ茶湯ニ必ス
茶菓子ニ水栗ヲ置ク餅菓子服ニ煮染其腸ニ水栗也
○水栗三式のむき様三ツ〜三つ巴つき通ひ わたり
ニテ外ハ赤きまゝ料理方第一の習なり

流傳 後座入 點茶 主方篇

主人も濃茶を相伴せん〜思ひぐ大目ニ居りて〜〜

數ノ字落ツ

九むき

口切なども相伴（又曰云口切茶相伴も有故へ云フ歟カ）せよ〳〵と
思ふ所ハ茶を出し〳〵勝手へ入り茶ヲ入て下座へ廻り帛
返す頃出るなり
流儀後炭主方ニ有
亭主の茶入返す躰を左へ渡し〳〵右手へ袋を取り左へ持
扨帛持添へ取りて左へ渡し〳〵右手へ茶入を取揚る此時上座先刻の御炭御所望
添へ右手へ茶入を取揚る此時上座先刻の御炭御所望
多く候乃今炭拝見仕度と云亭主先程も無調法仕
候此儘薄く御茶可進と云客是非に可被成旦ツハ御祝
之義に御座候と云亭主左様なれば亦不調法を掛

御目〳〵と云と勝手（立ツ）最前の釜へ炭を入し香合杯も
替る事なく持出て如圖置き釜を上々様も替る事なし
灰を蒔き輕く蒔べし炭に流れを見景の能く残りた
る庚面白く炭も未だ半分程もある所をば其儘置キテ
そろ〳〵と せ〳〵と落し〳〵夫に炭を置き掛る炭に手
を替へ輕くするぶ莫一の習也未々初心ハ仕ることき物
子細ハ前に炭ハ勝手〳〵思ひ賜へてする事 立炭は
流れに依る事故へむつか〳〵きせ悪〳〵て景を前
ハ前に不替釜へ入を拵へ事なし〳〵薫物くべて
其儘釜へ入し勝手（出す）借金ヲ懸る也羽箒にては

もゝ俗ゝ人ゝる又出ゞ釜の蓋取掛ケたる時客今日ハ恭奉存候
と云と亭主苗字ゝもあり又一旦苗字置ゝもあり首尾次第
也客も釜の沸音附ゝ暇乞をゝとゝ説もあり
流儀客退出亭主外露地ゝ送り出テ是ゝゝ御礼受ケ
候重ねゝの儀御出有難と云能ゝ
流儀夏手前の時客家ゝ向ゝ濃家をゝゝ真儒水
指の蓋をゝとり水を一杓茶ゝゝ入ゝ柄杓ゝゝ掬ゝ
汲ゝる又は場の暑き取なり
亡家百俗
不時の客尋らるゝハ掃除なゝゝ先ツ呼ゝ俗家

跡ゝ亭主掃除させやなり但ゝ俗人なをゝる
の節の迎計り掃除ゝゝもなゝ
ふ時の客ゝ然客の道ゝ出すべからず新義を出
すべゝ　同客暇らるゝ
ゝゝ客ゝ俗ゝ元ゝゝ時ゝ太ゝ客をたる者
掃物ゝ濡ゝゝ持出ゞべゝ　客をこの道ゝふゝ
毎ゝ戻する客ゝ濡ゝ
同俗家の方ゝ書状遣すハ朝夕後時間
ハ夕ゝゝ亡この節下ゝゝ出べゝ　あまらバ炭を
ゝゝ茶菓子出ゝ酒出ゝ濃茶ゝすゝ

流傳　貴人珍客ニハ夜會ハ如何ナリ　夜ハ物毎不自由ナル
モノ也又服加減モ違ヒコミホコリモ見ヘザル物ナレバ悪シト常
々紹鷗申サレ候　一 石州云　紹鷗申サレ候由ニテハ如何

六宗匠
貴人ナド御腰被掛時ハ第一御出入ノ衆常々御心易キ
方ナトハ假令常々疎クトモ呼事アリ是ニ客組ノ第一ト
スベシ　摘ロ傳

炭置作法篇　立炭

遠州流傳集
此立炭の事　前條流傳方法篇後炭ト同意ニして文中
も同じくなり　依而茲ニ略ス

炭置客炭　一 前條六宗匠炭所望客法篇ト同一ノ儀ナレ共茲ニ
云石州思フニ薫物ヲ焚ク氏事ニ少シ相違アリ如何前條ヲ
見合スベシ

六宗匠　亭主御望ニ被成候様ニト八寸ニ炭組ヲ出ル客御手前
ノ炭拝見致度ト云亭主强テ望ム氏左候はゞ御釜ヲ御上被成
候ヘト云亭主御むつかしながらゝ御上ケ被成候ヘト云
氏釜上炭スル也薫物くべて見事成ル香合ニ候间何レモ
御覧被成間敷カト云フ客何レモ御出ニ可被成ト云ヒ出ス也
石州云ケ様の事　如何とも如何不審

流儀　三月ハ臺炭置左勝手

鼠炭斗持出ラカギ置の真中向通ニ置き居返り
土鍋取り圓の處へ置クヽ皮取り出し釜蓋ハ
締の羽帚取釜蓋の上ニて拂ひ羽先直し圓の處ニ
置き鐶取釜ニ掛ケ懷すり敷紙取出し四月七月ハ置
炉際ニ寄釜上る風炉先の方へ向ひ釜をすらせ
鐶を外し下ハ置き又爐ニ向ひ羽帚ニて爐回り
土段迄拂ひ火箸を取り下火を直し じゝを消
し火箸を逆様ニ如圓建置其手ニて土鍋を取如圓
置き灰をヒてひ角々を直し土鍋ヲ取り

如圓脇ヘ寄セ白炭輪炭細炭ヲ土鍋ヘ入レ置き臺炭
拂指二本ニて置備テ火箸拂采て如心炭拂置く也
左ニて棚の香合取て右ニて香合の蓋拭取薫物を
炭ハ淋しき所又ハ早く火の附き安き所ヘ入レ蓋をす
るなり香合を乞火箸を執ヘ入右のゝまゝて蓋の表
を拭ひ如圓上座の前ニて出す備て茶道口の戸を明ケ
土鍋を出し鼠ヲ出し戸を立寄せ羽帚取て炉
廻り掃ハし土段五徳の爪ちゝ拂ひ羽帚カギ置ノ
直ニ中ノ臺ヘ戸を閉ケ勝ヘ口ニ先口持出る
上ハ釜蓋ト竹輪トを並ベ持出て如客置

竹輪下ニ置キ釜の蓋元片口の蓋下ニ敷あを釜差
シ片口下ニ置釜悦テ釜の蓋拭ひ則蓋をシテ左
ヲテ押ヘ釜の回リ拭ひ如元片口ニ載セ持テ立又出テ
釜の環掛ケ摺らせ寄セ炉ニ向ひ釜を取テ掛ケ左
ヲテ数紙取懐ヘ入し釜の磨直シ環外シ羽帚テ
掃テ勝ノ入又出テ帛ヲテ燈掃ヲ向テ拭ひ又
脱テ拭ヒ帛拂ヒ釜の口元を無る
流傳 自在炭ヲ鎖炭ヲ釜掃下ノ準序ナし炭ニ炉ニ除ク
日風炉左勝ノ炭ヲ炉序モ炭ニ除ク
六宗匠 四畳半炉左勝ノ點茶炭ニハブク

日臺月左勝ノ點法是ニ除ク
流傳遠別臺月構七莊炭ニ云ハズ
六宗匠 袋物の銘ヲ除ク
活法器物之篇
遠別流傳集
棗を帛ニ包ニ濃茶點る事あり 包様口傳小茶入
なども包む色帛を習テ作去勝手次第也
○棗の蓋は割蓋ニ取中次は挽蓋ニ取又棗を持ニハ
左手の小指を底ヘ一ツ掛て待中次頭切ハ指を揃ヘ一文字ニ持
ツ ○他ヲテ點茶の時棗中次等を拭可らず中の

蜻蜓（トンボウ）・胡離・
蜻蛉・蜻蛉・
蚊蟲・

茶山朋ラ〳〵也。○金輪寺ハ後醍醐帝勅作也則頭切也胴ハ一文字ニ〳〵て蓋こんもりとして身より蓋外へ一分計り〳〵も出テたる物也木ハ南天の根なる由又云五葉ノ松蔦也〳〵も云○棗ニ茶を入るるハ扨形中次頭切ハ一文字ニ〳〵て之のぎを立る

流傳茶入袋

袋の結び床ニ花あるゝ時ハ入蛉蜻花なき時ハ出蜻蛉
但シ長結の習也常の緒ニ朝晩の心替る
○小き茶入ハ中〳〵て棗の如く緒を解事あり
○大茶入の袋中柱ニ掛る時ハ緒の両方を取りて掛る

高麗（コマ）今の朝鮮

括（クヽリ）トツル（イタル）クヽル（ヤハズ）ムスフ

又ハ云括

紐前を柱の方ニなす遠例如此
○袋を元事ハ先ツ無事なり見事成るハ元もより〳〵

流傳

茶盌ハ食物の器日本〳〵て茶器ニ用フ大徳寺ハ五器手の茶盌渡る是を茶盌の隨一とす其中紅葉手の五器と云ふ能シ高麗渡りの中井戸熊川伊羅保此類能シ其外高麗より數々渡る分て割高臺ニ賣する八十ニ一ツ宛括十宛一括ニスル重ニ上ケたる上の茶碗括る時縄の動かぬ為ニ割也世ニ賣する巻頭の心也

六宗匠

棗の内納めの茶杓拭き茶を拂茶杓持出さるゝと云ふ
次きて帛紗貸被下と云其儘と辭退あるを達て望む時
亭主帛紗を四ツ折にして茶杓取り載中座へ置
拜領の茶杓は前へに亭主真譯を述べ帛紗に載て出す也
名作の茶杓の時は棗より
次にすりかた ○棗に茶杓置又は向の方に茶杓を附節
真中に成る樣に中次頭切は上より直一文字
茶入の茶杓を取るに貝先を外にして取る棗中次は貝先ヲ
傍向けて取る ○二股竹は根に七分の龍住の毒ありと三ツ
說あるよし 茶杓茶筅茶器等に用ふるを嫌ふ

流傳 茶筅洗三ツにして茶巾を改め又湯洗二ツにて埃
を見本座に置ク
茶巾認め樣 三ツ折八ツ折六ツ折帳に入 ○仕込に利休仕込
に遠別仕込 棚物仕込 天目仕込 たゞがゝ茶巾立折
仕込 ○風炉の時臺天目初めの茶巾假に立たゝむるに
は水指の上に可置也ふくさめ茶巾故に也
六宗匠柄杓 柄長サ一尺一寸三分合差渡二寸五分
遠別參禪の師 釜蹄に
江月宗玩に參学と出テたり又前條に（懸茶法に出テ）
春屋國師及澤庵江月西禪師に參学ともあり

窯（カマト）日 竈 下同

大口含翠日

遠州公古金襴ヲ好マレタル――是モ一説ノ説也

宗甫翁古金襴緞子ニ至ルマテ古キ切ヲ聚メ手鑑ナト

物スキ有リタルフシニテ休師以後ノ名物名ヲ所々

ル切モ多シ宗甫翁以後是ニ依テ種々ノ名ヲ付

近世其品類数多ニナリタル不住斎（薮家）ヲボロ

ルフ多シト云ルモ尤ナリ

遠州好七窯

志戸呂　遠江国　印有ハ若シ（雑録ニ四度路焼ト

膳所　近江国　後窯ニ梅林ノ印ヲ用テ焼タル物アリ

遠州時代窯今ハ無シ宗旦代ヨリ古シ

上野（アガノ）　豊前国

高取（鷹取トモ）　筑前国

朝日　山城宇治　或ハ西国トモ（豊前）

古曽部　摂津国

赤膚（ダヤ）　大和国郡山

或人云朝日焼ノ事ハ宗和ノ好ニテ朝日ノ印シ則チ

宗和ノ筆ナリト云　印文遠州ニ宗和ニ似タリ

トモ有リ其証得ズ

流傳香合客に出す時中柱の方へ出す

勅作公方家御作の香合ハこゝ〳〵盆に載せ下棚に載せ置炭の
ゆきこゝ〳〵盆ともに取出〳〵薫物炷也

六宗匠 片口極の事夏の間風炉の茶湯にハ木地片口口切より
塗片口也。塗片口に八蓋置出ス 木地片口ハ蓋置出さず

六宗匠 挿花

置花生ハ水請の地形(ギヤウ)を心得べし〳〵 花にテモ葉にテモ水
際より一分也一分より下る時ハ禁花也。一花一葉
四花四葉六花六葉禁花也。無花葉を生けを葉を
さ花を生けも然るなハ花に葉なきハあり梅桃
等ハ花の盛に葉なし〳〵 個様成物ハ不苦也又葉の
多くき物ハ花計り生る草 悪〳〵 又梅もどき
紫しきぶ等實のある木あり 斯様成物ハ花替
りて生る草あり 果し葉ハなし〳〵 ○歸り花ハ不生
也然ともこゝ客に依り生る草あり 旅立たるの人
るけ左此花を用ふべ〳〵 常ハ禁花なり子細ハ
祝義に嫌ノ故也 ○萬ッ殘花ハ不生也然トモ所る
因て生る草〳〵 新宅なゞを作事〳〵わたまし

うは此花を生ずべし　残花ハ期を失ふ花也　残花とハ
壁ハ菊ハ九月ハ期是ハ十月中ゝ未に生るゆへ正花
うは成りうくき也。花の縁切と云習あり　壁ゝ（ば
名さ花を面白ゝくゝ赤き花を中に挿たるを
縁切ゝと云ふ呆し下ゝ縁を結ぶか後ゝ縁
と結ぶるあり　新移植るもの功芝の（る処也
。むくげ　つゝじの類　椿の類　茶の花ちんちゝ花
雑頭花　ぎくゝ百合（姫百合　越後百合）の類ハ生けて能
ほゝせん花　女郎花　桔梗かるかや　ちきゝ　鬼あさゝ
山ゝつぎ　三ツ股の花　針のある花　木草ゝ　子生

移居ニハ青カ黄能シ　赤き花大イニ嫌也　火ノ字ヲ忌ム心也云
々。祝言ニ椿ヲ用ル心アリ　八千代ト云フ故ニ　千代（萬代　春カ
石菊云一首　なれてゝ
つゝもる雪もはるゝ
水ゝ草を高く立る事あり　古歌ニ
夏山の草葉の丈けぞ知らまほる春見ゝ　小松人ゝ
曳かねば。藤のゝせんかつら其外弱き花ハ晩方切り
たるが能シ　但シ朝咲の事也　晩方の咲ハ朝切て水ニ
生ゝて置べし。　。總て水際後（見通す様ニ
根元の亂しさる様ニ生るが第一也　。水邊の花葵壮若

あやめ類斯様の類ハ水際に習ひあり 筋一茎ハ大口より
餘の花ハ根元の氣ろ〳〵草を嫌ふ水邊の物ハ茎に一株
彼方に一株と株立〳〵生るもの也水辺の心也是を更道の
習と云也○河骨を生ずるハ花廣口花生也常の花ハ
水の中へ下る筆を蟠(とぐろ)し此花ハ二三輪水中へ入て生
る子細ハ水辺のとの故へ水に支る心也總じて生花の心ハ
斯様成る物也此河骨花を切りたるハ弱く〳〵て葉ハ
むさ〳〵故に水中〳〵根ともに取り寄せて花を生ずる猶
口傳あり○〳〵ぜんかづらを生るハ生ずる〳〵早花落安
く〳〵て客人のて〳〵必ず花落る物也夫し故へ花の真

中へ松葉を一本ツゝ差〳〵て置べし 左るくバ花皆
落る也○長春せうぶん等の類針ある物ハ針を取り生ず
る也○掛花生ハ筆一ハ藤の花ヲ貴賤に生る棚掛り
と云フ習ヒアリ口傳○〳〵ぜんかづら 木通風車 〳〵
せん花の類筋一に生ずる兎角上へ高く生て能し
掛花生に生ずる能き花ハ梅椿海棠黄梅蘇枋かくこ
草 連翹 藤 山吹 石竹 姫くわ人草 夏菊類芍藥東
寺藤 風車 〳〵ぜんかづら 朝顔ぎぼうし 秋海棠 秋菊
の類 さゝぐん花 水仙 寒花 あけびの花○舟の花入ハ
朝四ツ迄(午前十時)出舟 晩ハ入船と生る舟ハいつも客

の方一筋の鎖をする勝手の方二筋の鎖をする事也
○舟の花入定て四月十五日より八月中此外ハ無用
（石菊云大陽暦にて此見合あるべきか）○舟の花ハ舟の縁より下へさがるを嫌ふ也。舟の花入ハ底に水を打ッべし是舟を拭ひ〳〵生ケさまる汲上水を入る時ハ自ら汚をかきて能き也。舟に入して能き花美人けし櫻草 志ん菊 富士撫子 長春 がんひ 山ふき すゝかけ てまり 萃夏 ぼりん草 鉢草 庭櫻 石竹 姫百合 夏菊の類 阿蘭陀草 姫くわん草 岩藤 白蘭 紫蘭 くちなし葉 梅ぼち 熊谷 夏水仙 鷺草 鶏扇 日扇 あぢさい 口なし 泡盛 鐵せん 香蘭

百日紅 白だんす 藤ぼかし きぼ〳〵 色々 笹りんどう 龍菊 秋海棠 忘草 秋菊 ○草下の花に習ひ花生も小き物也花を草の足より外に系出猿に生ケ花も小形に生ケる物也。舟を花臺に置き（薄板又ハ竹を臺にそこに置き其上舟を載ス）臺にそこに置き置舟に〳〵生る事あり 釣舟と違ひ置き花入の心也

○月々花盛り

正月 梅 朔日草（ふくつく草共 ふくず草とも 石菊云福壽草の事なり） 椿 黄蓮の花（三月に至る）

二月 黄梅 蘇枋 かたこ草（カメノリ共） まんさく（ケマンシ七重草）

三月 連翹 ちやが 木蓮花 桃色々 たんぽぽ ちやくなん花

海棠 金鳳花（十二月三至九） 小米花 小梅花 小手鞠 沈丁花
馬酔木花 りんごの花 藤 麥の花 我妻原
四月 美人茅子 櫻草 牡丹 芍藥 長春 こぶ〜 びや〜
芙蓉 白鳥花 たまか〜わ きちんきく 富士なで〜こ
がんひ ぼけさら〜 一八 山吹 すぐかけ 手鞠
朝菊 けや人 馬りん草 卯の花 苏子の花 花菖蒲
牡丹 あやめ 庭(藤) 石竹
五月 姫百合 越後百合 博多百合 あ〜〜〜草 姫くわん草
鋸草 九輪 岩藤 菱 唐菱 〜〜〜ひ あぎミ
白蘭 紫蘭 河骨 くちなし 美人艸 くちな〜

河原撫子
六月 夏菊 種々アリ 鷺撫子 東寺藤 梅ばち 麥宵花
こやをぎ 風車 夏水仙 熊谷蓮花 鷺艸 鴉扇
あぢさい 下野なし 日扇 泡盆 泡雪 鐵せん
香蘭 百日紅。七月仙翁花 朝顔 白たんす 小車
藤袴 ぎぼ〜〜 畫顔 はまがは（[illegible]）
八月 笹りんど〜 紺菊 秋海棠 水菱 つわ
九月 曼陀羅草 秋菊 種々 熊菊 澤桔梗 梅もどき
紫式部
十月 朝日菊 茶山花 水仙 椿 早咲梅 なゝは

十月　椿　茶山花　梅　水仙　寒菊

流傳　數奇屋香爐莊飾篇

數奇者ハ香ヲ二三種懐中スベシ香ノ茶湯ニ入用銀盤モ可嗜　○釣香爐舟ノ所ニ掛ケテ向フニ掛物掛ケル也　後座花計リ也　又掛物ナ〳〵ニ釣香炉計リ初座ニ掛ケ後掛物ト花ト置事ニアリ

流傳壺飾

掛物ヲ掛ケ前ニ壺ヲ飾　細ヲ掛ケルアリ　口覆ヲ爲スアリ　袋入ニスルアリ　壺ノ下ニハ必ストヽ蒲團ニ綿ヲ入レ

計ノ方ヨシ

木槲

裏炭前客ヨリ乞フ　ハ口締ノ緒ヲ解キ上ノ覆ヲ取リテ次ニ出ス

點茶法　露地篇　露地

六宗匠　不時ノ客ヲ尋ラルヽモ　掃除ナ〳〵　又先ツ呼入シ落葉ヲ取リ其ノ間ニ掃除させる也　侘人ハ水鉢ノ辺迄計ヲ不出

○手水鉢　金ノ物　焼物ノ手水鉢ハ柄杓ノ底ノもたを解遠〳〵置ク也　桶ノ時ハ傍向テ置キ　石ノ時ハ横ニシテ置也

○庭木　花ある木ヲ嫌フ　勿論草花ノ分嫌フ　葉落易キ物モ嫌フ　其外　楓ハ格別也　傳　植ヘテ能キ物　松楓　椹　たもつこく　南天　枳　椎　柾　もふち　ゆづり葉

賢木
神樹
檀（マユミ）　白頂花（ハクテウゲ）
偏芳（ヘンホウ）
杜谷樹

榊　柊（ひいらぎ）　樹　いぶき　びやくしん　たらゆ　あて　檜　杜杷
かなめ　槇　犬槇　やとみ　蘇鐵　梭樹　銀杏（ギンナン）　虎尾　ほう
柏　眞弓　山ゝゝ　夏はせ　そろさ　糸すゝき　萬年青（ヲモト）　熊笹
石菖　青木　白鳥花　竹ノ類也
石燈籠置所　水露地ハ順（順ハ勝手）　外露地ハ逆ニ置ノ（逆ハ客附き植込ノ方）

流傳　中立ニ手水遣ひヨリ出る時風吹の時ハ水を合ニ半分程入レて掛け置也。影向の石待合との向中潛の飛違とも
ある石也　亭主の迎ニ出る場故ニ爾云ニ遠州の露地の手水鉢
ハ長石ニて二尺程有り下臺石の見まる様ニ相手の石ゝ

二尺四寸のゝ水門の内深き故ニ三間四方程ニて次第ニ
深く成たる物也地苔を附け熊笹おもゝ拔ゝ手
水鉢ニて一景取たる也。手水鉢の水受の下を中程ヲ
四角ニ操りたるを待景石也是ニ湯を尼口ニ入て出す
爲也。露地の飛石ハ表を外の方ニ有ゝ書院前表
を書院の方ニなるを習也。石燈籠傍ニ寄て見
ざる物也遠目ニ見るが能シ。石燈籠順逆の習とあり
水露地ハ月ヲ表外露地ハ日ヲ表道筋ヲ照す。石
燈籠ハ鹿園院殿御庭前ニ何所ゝゝ鷹来り立石
の上ニ入て鈴ヲ鳴ス事年頃ヲ經メり其後来ラズ其

石ノ本ヲ見ルニ鷹ノ死躰ト鈴アリ相公之レヲ憐ミ其石ニ狹間ヲ透シ燈明ヲ灯シテ吊フ是始メ也

○御成の時内腰掛の内御召下駄御召草履置クベシ

○雪隱跡隱しの砂古ハ後の板にはね掛く遠州ハ後ニ高く盛るは内掛ケまゝ板に砂ノ跡所ノ也

○雪隱塵穴ハ九寸の四六寸松葉入し上へ時の米を入る

刀魚の塵穴に同

○或問露地に柴垣をなし二本の柱を建テ小き戸の跡先に木竹を出したるを猿戸と云フハ如何

答此しに二説あり戸の両方に柱を二本立テて其木の頭ヲ四方より切りて真中ヲ(真中ト頂ノ間ヲ切リ名絶一文字に切る是し猿の頭に似たり迎名附又奥山にて猿幾ゞも手ト手を取りて人を留る其心を取り跡先に竹を出したる猿のるを曳たる形を表するより名附るとも云フ故に錠前に口傳あり

露路第目附ある所を踏可らず石の上に限る○遠山を受たる景ハ必ず心を附らるべし

茶事に恥者高物ノ為に破産スル者趣カラズ鷗休ノ本意ヲ思ハ茶事ハ決シテサル者カマシキコトニ非ズ也或人休に同じ

以上

小堀遠州公歌中一首

休答ヘテ曰
青苔日厚自
無塵ノ一句ヲ示シ
又遠列ハ
朧月海スコシアル木ノ間哉ト答
ヘタリト云イカニモ
此詩句ノ意味ヨソ茶ノ極意ナル
ベケレ

朧月海すこしある木のつる哉

茶入銘名を附て小堀公の歌

飛鳥川　茶入　金華山

はやくるるかてくくて飛鳥川流をてすまき
月るるかりなり

きのふといひくくて飛鳥川流をて
もすまき月るかりなり

遠列公和泉の堺にて初めて見られ　はや茶入
まて為かりにて又正後伏見にて又ふられ
はや半ばるれぬかりふるくるかりに事を祈

欠伸子ハ江月和尚
猶袋子

東山殿ノ頃ヨリ利休翁其外高名ノ茶人茶入ハ唐物名物ヨリテ貴玩アリシニ遠列時代ヨリ中古ノ物ヲ以テ貴トセラル

流れをてもすまき月のかりにて古今を
もる道のはらき

流急不留飛鳥川　光陰回首幾推迁
昨非今是又明日　三世醒来一睡眠

欠伸子

滑飛鳥川ト云茶入　又一通りの綱と悪敢大み
劣る

夏山　茶入　春慶

夏山みまるをすぐ　夏籠あらてん
又まる　二ツ三ツ四ツ

昔人背高ノ茶入背高ノシテ取扱モ悪敷方ナレバ後ノ世ノ人氣ヲ考背高サ三寸餘ニ過ズ巻モ尋常ノ物ヲ賞玩シテ面白キ茶入ニハ古歌ノコヽロヲ以テ名号ヲ付ラレタリ又遠州自詠モアルベシ

基山のちゝ乃ゝ宮稲ゝ川の元
ゝ〻もゝ〻〻〻〻〻〻きかな

數多の中に此茶入もくれて見まるゝいふ事めて
金葉盛戸乃 大概、西行のかゝきに此基山のゝの

落穂 茶入 万右衛門 京作又瀬戸後作ゝ

永井信齋（信濃守尚政）侯の家臣 佐川田昌俊所持

伊勢物語

お住て為穂ひらふゝきゝおせて
家も田作らみ由ゝ〻ものを

茶道筌蹄茶入ノ部ニ萬右エ門作落穂トゝふ名物千家所持トアリ

此茶入ハ坂和田昌俊（稱喜兵）いつくみゝひろひ得ゝ也
遠州公名号ゝ〻如是公ゝ。唐衣ゝいふ茶杓を添て
遣ゝさんゝゝと云

江月和尚 宗甫両筆 落穂茶入の記

小壺一説ゝさる所ゝ
殊ニ住たる駄ニまゝ為穂ゝ

秋風一陳来

五字横物并茶入共 今 阿部侯所持ト云

珍説要録ニ云淀の城主の家来佐川田喜六好ゝ〻茶の道
を嗜ゝゝる由いつゝもゝ求得たり何ゝと

やらんとはらく〜き覚えられまで或時遠州侯を招
請〜て見せられまをば是ハ萬右衛門の作なり〜〜
さんたりさも〜左様とは存せず扇来こたし
たりとて大ゐに感あびられ銘を付て〜残せ
まをと申こもの事をば遠州茶ハひろふ物なり
ち義堂と名付給ふ〜〜〜いたれ〜〜〜所坂和
田悦びと度義堂とぞいひける其頃の老中堀田
相州（相模守）用及ばれ喜ん〜所望致ましたり
依川田やむ事を得ず相州（参らせ）たり元ろ
ひ物なり〜〜て義堂と名付〜〜を貰ふを〜

し是非なく〜〜此所天王子屋慶子私所持の茶入是
又相たる様ゝ〜をば元亨の見せらるを〜
所則茶子とりよせ遠州公に見せられまをば是同様
万右衛門の作なり随分大切にしなさるよ〜あり
〜をば茶子何とか銘を取ひきをば田面と名
付給ふ茶子長く象に付〜〜〜〜〜
無事庵石菊所持茶穂手の儀既に茶器詳細事
千ノ部茶器一二に出ス

常盤　茶入　古今春上源むねゆき
花の盤なる松のこゝろも春くれぬ

雜録、春慶作

今ひとしほの色まさりけり

此茶入年ふるくるるみたかひ色まさるといふ事のそし

雪の下　古瀬戸　雪柳トモ

かつきやとのそ雪のふる柳

よそ目は蔵る滝のそ糸　出所未考

遠州公家来村瀬某所持の茶入なり　真出来柳の枝ハ雪のふりかゝりたるみゝかゝりて雪柳とゝ名ちらる又雪の下とも云ふ

橋姫　茶入　藤四郎　遠州公所持　真中古

宇治橋姫社
瀬織津姫命
欽明天皇三年始めて宇治橋三の間に奉祀す
後橋詰に移す
橋普請毎に修繕せし
明治三年の洪水に流し今地に住吉社と共に移す悪縁を断つに霊験アリ

さそ〳〵孤み衣かさ〳〵さ今霞ゆゑ
袖をまくらんく〳〵のそ〳〵　姫

無類なる茶入を取なびて見る人のなさは
遺憾なりとて遠州公我を行らんと
いふとみて古人遠よそ人とゝ

玉柏　茶入　金華山　千載恋一源俊頼
遠州公秘蔵

紅深津の藻る埋もるる格弱をてゝ
人ゆ恋めや人の恋ちや　たゆ

ちゃと屋ともアリ

此茶入奈良屋弥兵衛ト云者摂津國難波の浦
にて取出したり古歌ヲ以名附給フ

後西院御震筆掛物添外ニ

風早殿手箇添

たぐひなや子もの浜のそんなるまで
又るゝはまさきをるぶかしをがしも

茶の見事さの品〻率吟の一首如此名物類
聚ニ玉柏を常盤とあり箱ニ
ときたちたる松のみどりも春くまなき
今比とは〻の色まさりもの

登蹄ニ真中ニ右ノ内ニ柳蔵鄙トモアリ可考

此歌を書たり　後西院の御宸筆ト掛物并
并風早殿手紙も添とあれど玉柏の御歌
なり常盤ハ別の茶入なるべきうふるの事也

柳手　茶入　萬右衛門　新古今夏西行

色野辺の清水のたまるまで柳ぞ
ちぬ〻〻とそこに立とまりけり

遠の公関東へ下られ道中ニ小家の棚ゆ
あるを見給ひ立ぞ〻と駕籠を留のて茶の
給ふとぞ　後改　宝甫庚　振歌ト云其故ハ

玉なぐれ裏表にアリテふり出ごとの大豆のさが
りたるも似たるあり〳〵

廣澤　茶入　金華山　松平備中守殿所持

廣沢の池乃ほとりにて月を見る〳〵
えらん人もなし〳〵　秋乃夜の月

遠州辰ヶ市どの茶入を今まで見る人のなかり
し名品の事なりしに
上仁物語り給しも口の油足なるを得る
功者の云此名の無くるる〳〵かなし

辰の市　古瀬戸　遠州辰所持

うき名のうたつの市とハ聚げ〳〵
いさまと人をうるの〳〵もなし〳〵
大和辰の市と云里より出るなる云

拾遺　哀人麻呂

薄色ハ花都也薄赤色石目口捻り逆〳〵下ゲ
藥様黒〳〵　上ハ藥むら〳〵掛り流れ

青江手　茶入　金華山　龍浪

遠州公家臣　勝田某所持〳〵公ハ献入公科のなり

悦び給ひ茶入の名、瀧浪と云より其名を瀧浪と呼び給ふ其後青江の脇差を拝領ス因テ世に青江手ト云

市場手 茶入破風窪 美濃り破風に成る故

古歌に此哥出所未考

世の中を市のかり場の一さりき
もらしてしかるもなし

此茶入或人北國の市町にて求めたり則チ銘と成る是に似たるを寺の用ともも云ふ

鹿島常州
又肥前藤津郡
鹿島鍋島侯
在城二万石

懸想 カケン ケソウ

常陸帯手

正月十日鹿嶋の神事に帯をかくる事あり此茶入も帯あり依て名とす多くハ唐物にて

俊頼抄に云常陸国鹿島明神の祭日女のけさうし人のあまたあるを名どもを布の帯に書つけて神前におくなりもべき男の名書てるハおのつからの裏かつる女さもとあるハ男ゑきバやかてとくるを云々此事をひたち帯と云古心ゑてよるあるを東路はみちのくにてなるひたち帯かぐてぐかりもあちんとそ思ふ

可中　古瀬戸　今古雑下在原行平業平兄

いくらとも問人あらぬ須磨の浦に

わくらはつゝ侘ぬるかな

釣舟　古瀬戸　古今羇旅小野たゞむら

和田の原八十島かけて漕出ぬと

人には告よあまの釣舟

伊勢集　古瀬戸　詞花恵下恵慶法師

色まさるはまゆふかぜにいとすゝけ

いとゞ我身をうらびさびるかな

凡手　破風　雑録、凡外できまゝ意

あり〳〵ふり多利休識数の物たるべし

時代を見まゝ凡中興

此茶入此名の故事八茶入の持る秘蔵渋かゝ

ゝ凡世間に勢たるべき物と自慢の心

ゝ凡ゝ云物なり

音羽　破風　古今恵一在原元方

音羽山おとにきゝつゝ逢坂の

関の清水に年をふるかな

此茶入京の町人呼持もるよし　遠州再

ふきて年久しく或時伏見にて求め給ひて
喜内と名付らる

罔邊 正意 又後窪トモ

松たてるあかくまむらふ違广どの
くもゆく空もあそんしもよ

面壁 正意

九年坐久面不見 拂ニ六宗ニ盡シテ無一
點ノ塵

色即 金華山 箱蓋 江月書

表 色即是空 空即是色

塗蹄ニ源三郎トアリ

裏 むらさき色なき君ハ誰か身にも
よしとみむ人も有めせなくによそ

環(タマキ) 源十郎 又後窪 新古秋上 式子内親王

それなからむかしにもあらぬ
秋風にいとゝなかめをしつのおたまき

有明 源十郎 又後窪 玉葉秋下 俊成

またたぐひあらしの山の麓寺
杦のいほりにありあけの月

山雀(カラ) 新兵衛 玉葉雑三 寂蓮法師

たれそれも羽うしゝやまし 山からの

[illegible]

相坂　古瀬戸

孤蓬菴主一日袖小壺来賜一盌之茶之次告予云此壺元来無名如何目焉矣於于茲有傍人不意吟古歌者

相坂のあふさの風に[illegible]

此歌古今雑下[illegible]人[illegible]

菴主聽此一吟目相坂予曰何為然也

菴主云臨江齋山居之時以右之古歌重而

石菊云臨江齋ハ里村紹巴也

張成　楊茂　周明

此三人ハ宋朝ニテ堆朱ノ三作ト云

詠　盆漆張成造也五葉内赤底黒塗

相坂のあふさの風に[illegible]

人[illegible]

玩弄小壺底同如這歌者乎予曰唯々是故便見需着一語遮裏無隻字依什麽銘之矣雖然如斯菴主者予二十餘年之舊識也難忘厥親戚賦一偈露醜拙云

紫扉獨閉去何之紙被遮寒樂此涯昨日非今今日是明朝難易有誰知

元和三丁巳臘月日　江月叟宗玩書

雉子（キジ）
又野鶏（キヾス）

福岩左衛門大夫正則の子

淺野　古瀬戸

昔年淺野氏の人所持ようて一器の名とする淡路國淺野をよめる歌

新葉恋二入道前右大臣

いくめせもしたのぶとまんと祈ふたて〜
浦めやきぐれかくまなきそを

雉子なく〜祈と此うつもものも浦野此名ゆ
たてるあや正則公のあらせ此なひぐうて
筆をそるなるべし

宗甫判

仙岳宗洞ハ笑嶺ノ嗣ナリ大徳百十二世無底籃金毛閣ノ額ハ此和尚ノ筆也

破被（ヤブレフスマ）　古瀬戸

むらさきやあけの衣もうらゑん〜〜〜
やぶれふすまるゆ松風の音

孤蓬庵主之筆蹟見書之次人呼一小壺目破被此小壺ハ則菴主所興春日宮人一物也右之一首者予師叔仙嶽禪師閑居之雜詠也并頌曰（師叔ハ尊稱也）

常閑松門百不聞遠籬野菜蝶紛々
風流文物非吾事紙被一張眠白雲
重而請記之頌歌之外別有什麼需

乱遏（書留ノ辞也ミダリニ書トヽムト云フナリ）

同（如ト）破被ノ咲倒紫袍錦綉則此一小壺
如（ニ）視無量ノ珍宝者乎松風元来茶聲汝穏
坐閑居而観之不勞千金価可楽其楽ヲ
古人云貧者士之常有何憂哉書以代銘ニ
矣　　糟袋子乱遏（糟ノ字ナラン）

白ラ浪　金華山　新古神祇中院入道右大臣

立かへり又もみまくのわすれ草
みなそこ川の澎ぐりなら

浅芽　古瀬戸　新後秋上前中納言俊定

色かへる野辺の浅芽はおくれ葉を
もとゝ思ふかけてゝ秋風ぞふく

白菊　窯所未考

るひあらしに誰かはいとも未みるふ
秋ゝ後のきくの菊のもれ

白露　金華山　源氏雪木

ゝそへてもゝ見るべかりけり白露は
玉ゝるおきゝ切　相貝のもゝ

山の井　窯所未考　大和物語

澎香山かもゝ人まる山の井は

あさくハ人をあやぶむものかな

澪標　後窪　源氏

こをづゝ　ふるゝ　みまくさに

めくりあひぬる　えにしふかし

思ひ川　藤四郎　續後撰春下　定家

山吹乃　もゆるせかゝ　おもひ川

色の千へに　ちるぞ　ゆゝしき

宮城野　月上　千載秋上　源俊頼

さまゝ　ゆゝ心ぞ　ふる　高野の

ものゝ　ゆゝ　虫乃　ねゝ

雲井　金華山後撰恋四　よみ人しらず

ゆくすゑも　かぎりなき

心をぞ　この井ゆゝ　遠き人しる

木下　月上　新古春下　康資王母

山桜　花の下風　吹ゆゝ

木のもとに　雪ぞ　ふりける

木枯　金華山　新古秋下　権中納言長方

飛鳥川　淵ぞ　ゆゝ

かつゝ　ぞ　山のあらし　ゆゝ　風

増鏡　破風窪　拾遺恋四　人丸

まちかねてしのぶの山の時鳥
こえもしらぬ君をあくるかなしさ

名物類聚に増鏡の箱書有

まちくらみそまたるる新みむらひみて
こえもしらぬ君をあくるかなしさ

又まちかねてそまたるる新みむらひみて
こえもしらぬ君をあくるかなしさ

つをを祝せんや

三輪山　金華山　古今恋五　伊勢

こ海の山いくる待人のふしもたつめる人もあらじと思へど

藤浪　月上　新古春下　延壽御製

かくてうてみまくほしきかはるとも
万代をかけてあしたの藤浪のもれ

鏡川　月上　夫木顕仲

かぐみ川新しる月みる底をみて
ちづむこく川のちづのしき浪

皆の川　破風窪　拾遺貞外下

おく妻はなうまてもあき

みるの川　霞の淵ゆくも散月新

忌水　破風窓　風雅戀四　頼政

人もみなむしぶなれしもきも

我のこあうゆ　ちらすすき

篤（ウテ）　月上　新古雜中　前大納言為氏

すゑんもゆこまもんこ　勢多山里も

かこうひのあれあるゆまかせて

玉川　月上　碧玉集　宗尊親王

いろそえるもぢの玉川たづきて

宗尊親王ハ源頼朝ヨリ六世ノ將軍

色なる浪の秋乃ゆふぐも

玉津島　月上　玉葉雜一　崇徳院御製

そぎがてゆゑ　ゆあるゆ玉ゆ

むべこそ神も心ゆ

蓬生　月上　源氏

たづねてこそ我さそこそあの道しなく

ふかきよもぎのもとゆ

布引　月上　千載雜上　藤原良清

音ふのこゆ　ゆとの数なくて

名よりもこるき布引乃こゆ

崇徳院ハ神武天皇ヨリ七十九世天皇

妹背山　金葉山新勅撰雜四中納言国信

あさみどりかすみこめたる
たなびきそめぬいもせ山ぞ

盤余野　同上　續拾秋上　前中大臣

をぎの花誰みやうゑきむらづゝの
ゆふれの野辺秋乃夕ぐれ

吳竹　同上　壬生集　二品家隆

風ふくそよふ人もなき友なれや
子たちかゝ〳〵もたる谷のくまゝ

垣衾　破風窪　渋紙手　六百番　有家

むくらちふ城ゝ垣衾もゑかつて
光さしとなるまふ負のをなし

霜夜　文琳　古今俳諧よしゝ人さゝず

さゆるよゝ又夏ハ人まちのそゝ
さゆく雨霜夜とをひとりぬる

凡器物の名号ハ真何ふまて〻見ひよ
きるなれハ古歌古語ことふ沢もあゝさる
べ〻古器物の名号平仮名〻かゝび真子仮
名がきもあれで右のゝ引ゝこと名号の子細皆真
人ゆゑて志ゝ〻たるゆハあゝざるべ〻かくし

まぐ〳〵と古人の考へたる〳〵おきたるなれば
余りも及び又考へたるもとに出かへたまぢかぎり
なき茶の名をもてる物を悉〳〵穿鑿せも
はべり〳〵なる物ぞ多くひ猿の月よひとし
き業なり〳〵
東山殿の頃もち利休翁其外高名の茶人茶入は唐
物を以貴玩あり〳〵又小堀遠州時代もち中古之物ヲ
以て貴とせらる昔の茶入背高〳〵て取扱ヒモ悪敷方
なれ八後の世の人氣を考へ背高サ三寸餘に過ぎず巻
を尋常の物を貴玩〳〵て面白き茶入ニハ古歌の心

を以て名号ヲ有らまたり又遠州自詠もまぐ〳〵

茶入數五十四

茶道評林遠州見立の茶入數六十一有然ルに
七ツ不足するなり後調出〳〵茲に顯ス

左の野田手　早乙女手　面影手　撰屑手
打出手　北斗手　雞手　真弓
此八ツヲ加へて六十二となる

國燒ハ左ノ如ク釜蹄ニ出メリ

薩摩

鷹取 筑前 古鷹取ト云ハ太閤時代也唐物ト同樣ニテ左リ糸切也

肥後 八代燒也 吉兵衛ト云名人有太閤時代ヨリ後也

膳所 丹波下ニ云

茶道釜蹄國燒之辨 遠州ニ由然ラ今

薩摩 古薩摩ト云ハ利休時代遠州好ム瓢箪形ヲ數十命セラレテ造ル底ム甫十ト彫銘ス故ニ甫十ト云フ肥後薩摩ヲ實ハ肥後燒也

（石蔵云甫十ト云ハ小堀宗甫の甫の一字ト數の十ヲ以テ甫十ト彫シ物ナリ）

雜録 古き瀬戸ニ能ク似タリ

宗甫ト云名ヲ紹鷗門人ニ重宗甫ニ櫛屋宗甫ト也云堺の住人瓜紅臺子元唐物ヲ光ヲ宗甫ト云 又山科宗甫 千少庵ノ二男宗旦ノ弟也山科ニ住スルヲ以山科ノ苗字ヲ号ス 花押

信楽 至テ上作ハ新二郎作ニテ彫ノ字ノ彫銘アリ彫ノ樣ヲ見ル也

伊賀 新二郎ノ同作アリ信楽伊賀トモ古キハ花桶指限リ茶入ハ利休時代ヨリ古キハナシ

備前 至テ古作アリ利休所持ニ布袋ト云茶入在リ由然アリ無疑

尹部 備前ノ別所ノ窯也

祖母懐 美濃燒利休時代ヨリ古キハナシ

小瀬戸 是ハ大窯の手ハ窯の手ヨリ

○丹波 古丹波ハ太閤時代也 山科ヲ千家所持ス

元伯 山科宗甫ハ茶ニ引きて道ヲ求メル事

名舟 当時ハ山中氏所持今の名山科ノ未詳（鴻池ノ）

膳所 近江國 遠州時代也 今ハ窯ヲ遠州公の好ミ焼ニ千宗旦時代ヨリ古

唐津 肥前 遠州時代 古唐津ハ茶入ヲ古ニ

茶碗ノ焼ニ

古國燒 遠州代ノ記ス

本朝陶器攷證

大窯物 遠州時代 尾州燒

茶入の形に依りさまざまの名目あれどそれより
をさまりて本朝陶器改證に出たる丹小堀遠州
侯の貴あるのを左に出す
茶入も古瀬戸名物　小瀬戸は大窯の子小窯の子
春慶藤四郎入道　その名なり
真中古　二代藤四郎
金華山　三代藤四郎
破風窯　四代藤四郎
後窯　四代より後を後窯とする
右のものも茶入の銘作等なれど茶器の部に委し

此野田屋弥兵衛奈良トアリ又玉柏茶入ハ奈良屋弥兵衛トアリ誤ルベカズ

野田手　真中古
奈良野田屋弥兵衛所持したる後加州小松黄門（前田）
名上ゲらるるて後に遠州侯へ見せられ又大に賞美
則持主の名を以て茶入の名付られしとぶ
一説に遠州侯野田の藤見に行かるるに其夜
夢に手に入る所なりとぶ
早乙女手
此茶入の手触としては腰帯二筋あり是を早苗
とる女の重帯とする腰にあるとして遠州
公名付らる

面影手

此根元ハ所持する人自慢して面影凡そに似たるを以て遠列辰其詞を以名付らるる

（凡手破風此名の故事は茶人の持主秘蔵深かりし凡世に珍らしきぐき物を自慢の心深く依て凡そ云相頼こなるふりを利休織部の似せもて凡中興

撰屑手

渋紙にて丸圓座あるものを遠列人に買せて跡にて取らるるくづの中より茶入を名付

出たるを其事なり

打出の手

遠列公近江の大津にて求め給ふ大津打出の槌なり也（濱セトアリ）

北斗手

或人元祖藤四郎作の茶入を遠列辰見せ給ふに茶入なるを名付て給はれと持来せしに則北斗と付給ふ茶入の中に星あり其意ハ如北辰の居て衆星共之に云本文の通りいかなる人し此茶入を見給へかし見出

せざるんやとの名号あり　今加州大聖寺に持主
あるよし

雞手

遠州戸在江戸の折ふし　市旗本某此茶入を
自慢あて茶の湯に出さるるたり　其故は客人の中に
此手の茶入を所持の人あるゆえ依て主客互に勝劣
の議に相なり　真坐に取寄引合せ見給つる
客人の方遠に勝りたり　因て遠州雞と名
号あり　合せて勝負あり　と云ふ
一説に　龍田神職の人所持する茶入の
雞と云と

真弓

此茶入の根元は遠州戸の家に所持
新勅神祇とりもの一寄
あることい　た品なきものの一摔ら
まあてつきすきひてもなし
如是　遠州公の真蹟包紙添

合茶入數七品

總計數六十二

此餘に頼戸茶入の名号あり　鬼に角此次に出て

本朝陶器攷證に茶入の形に依りさめの名目あれども其あるべきを

雜録に渋茶の見立也

但し茶入の名を小堀氏か又何某たるかを我し

こゝす

禾目す

・藥の地肌と筆の先とを突たる如くに細かなる黒藥

一面にあり也てちさき點をさして禾目と云

後禾目手

禾のすに能く似たり貴翫なり

金花禾手

捻り返しなし本禾目より後のものゝ

渋紙手　類をくたし

雜録に万物の蓋に用様に割れ形ぬきたり物を塗

雜録に真中古筐蹄に破目窯に黄米物あり其後の黄米と云

藥立を見立喩て云へ世間に渋茶と云茶入は

俵窯を云へ

捻貫手

禾ぬきと云ハ一万番のふとに用るなり　鉄砲の筒

に禾ぬきあり其名とよそへていふなり

黄藥す

真中古黄藥すと云尻膨と黄藥第一とハ後

黄米手と云あり　土薄赤き見へて細工不宜尻

膨多し此手の類澤山なり　真中古の黄藥ハ

稀なり　内黄藥手と云なり　茶入の内にもつとり

雜錄ニ天目手建山ノ天目ノ形ナリトアリ

とゝて其上ゟ黄藥なるゝあるゝ見事也

天目手

瀬戸の天目手ゝて建盞の天目ゝを見る如く藥面り厚く銀光りつゝゝと黑き柿蛇蝎の様なる藥ゝゝゝゝゝ文り手厚く見るゝもの也

建盞ト云事茲ニ詳解ス石菊加筆ス

天目ト云ハ建安縣天目山ニテ焼ニ物故天目ト云

此天目ノ種類ハ茶盌ノ部分ニ詳也

此建盞ト云ハ建安縣ノ盞ト云フ也イツレノ手トモ付ザルヲ建盞ト名ヅク

口廣手

此名子細なゝゝ口の廣きを云ニ此手を本口廣ト云類ノ稀成ルもの也今一通り口廣ト云ハ渋紙手の口廣きをも云ト此類も澤山ニハ無き物也

小川手

小川宗貞ト云者取出ゝたるゝより銘ト成る

茲ニ石菊云小川宗貞ト云ハ千道安門人ニ小川左馬助茲々庵祐慈ト云アリ又桑山左近ノ門ニテ小川主馬ト云アリ又織部門ニ平野屋宗貞ト云アリ此宗貞ノ毋

爬 クワ 掻也又作把
把 ミギル ツカム
掻 カク ツカム テニトル

三畳向切也是し織部好也此所ヲ以テ考フルニ小川氏
宗貞ト云カモ知レン但シ小川左馬助ノ取出シタルヤ

下髪手

坊主ゑの作ト同事の物也坊主ゑりの清〳〵濃き
黒流シ女の髪の如し〳〵藥苗りの辺まで下る但シ
光ゑの茶入も同作也

爬取手

藥苗リ高ク衣類ノ裾をかひどりたるゑ
るゑ遠別奚の見立也

姉手 後窯

雑録、山道をふうくゝ切〳〵

是ハ藤四郎が後家のよ〳〵依て後家ゑりも云

序堂坊主手 後窯

此茶入は稀成る物也古瀬戸ゑ紛るゝ物也序堂
坊主の作也又或説に捻り返〳〵なく坊主頭の
やゝなるゑも云古瀬戸にまぎるゝと云も此類
なるべし〳〵上作にあらぬゑも云

又茶道雑録に序堂坊主古瀬戸を似たる也冥品也
トアリ

山道手 後窯

利休時代此茶入の手曲〳〵て山道を肩の下か

たゝ深くゝと切るなり又山道のおきもなり

・茶道雜録に山道をふかくゝ切る稀也

遠山手

右山道ト同作也胴又遠山を切るもあり

山道〳〵あるなり

・茶道雜録に遠山の景あり

頸長手

茶入の肩立のびゝる又依て是を金華山の

頸長と云糸切るゝ捻り返ゝなゝ

・茶道雜録に金花山の頸長き也

喻ヘト

赤熊手

坊主ゟと一作也此手は稀也濃き黒藥肩と

取巻幾筋もゝ物なり是を是かゝらる

喻ゝ云

追覆手

此名の事八畳着底の内近も藥かゝりて土ゟ

見るゝ茶入は移也まゝ〳〵追覆と云フ

厭面手

此茶入の手曲〳〵エクボあり序前ゟ世上

ゝゝふ狂言の面の如く下張ゝゝエクボの

ゐて依て乙寺前ゝ屬ゝ云

半切茶入（半切手）

水桶ゝ半切ゝゝ物有其形を以半切手ゝ云

大覚寺手

根元大覚寺寺門跡ゝ出たる茶入也（又云かくゝ）

京都北西ノ方面真言宗大澤池ノ西ゝ在り此所初メ嵯峨帝ノ離宮淳和帝是ヲ寺トなゝ第二皇子恒寂法師ヲ開基ゝせり代々門跡地なり本尊五大尊ハ弘法大師ノ作也境内迦雅洛西ゝ名刹也

米一手

形米一狂言の俵ゝ似たる名付る渦ウ切

雜錄ニモアリ

比丘貞手

胴の真中ゝ法ゝ丸ゝ形比丘貞狂ゝの面ゝ似たゝ

蟋蟀キリギリス手

下藥薄赤色の黄藥也上藥ゝ青藥あゝ

依ゝゝ云

鼠大瓶

城列伏見大瓶谷より出たる也依てしかる時代ふる〳〵

後大瓶手

茶入形ふりぐ〳〵なりの肩衝多〳〵金氣の飛藥必すあり底ゐ祖母懐と書有たる茶入もあり

贋物多〳〵

面取手

肩底ゐ面を取る類多〳〵下作物也

雜錄。取らくそくうあたり

誉

櫛茶

面取りの面不取り

右同作と雖も薄ゆうして上細工也

但〳〵面を〳〵肩衝背の低きは半切と云ふ

蠟燭手

らくそくの取と似たる故云是ハ古瀬戸なり

此藥柿に青色也黑藥多く有て藥留り高く糸目太きる也蠟燭一代より後いづれも燒也

本らくそくの系是なり土はいろ〳〵

磁茶手 此櫛茶 春慶とも有 破風とも

茶入の胴ゐ山形或ハ檜垣或ハ筋を切る磁茶

と云ふ唐土にて煎茶の茶を研る研木を碓木といふ頸の回りに鐶ありて先きとの也
太く磨てくと云

芋子 芋頭手 （雜録に芋子 芋魁と二品に

大形の茶入稀也肩を衝たるを茶壺名義
を其形に依て云 芋頭同作也

釣鐘芋子 （雜録文言下に云

撞鐘の形に似たり 芋子と同前也

茶道雜録に芋子 芋魁 寛永頃マデ 三百年
釣鐘芋子ハツリカ子に似タリ

又兼霞堂本村 雜録四 鳥鐘トアリ

撞ツク

杜

加藤四郎太郎 宋国に渡り建安天目山陶法を傳ヘテ帰リ梅ト椿トノ灰ヲ藥ニ交ヲ又椿手ト云ハ椿ノ灰ヲ用ヒテ焼タルヤリ本邦陶器の祖出タリ

上ノ底手 （雜録に云底ノ桶の如くに付たるく
桶の底の如くあげたる物也 桶底とも云
芋子同作也

杜若子 （ハツ橋も）
茶入の胴の廻りを八ツ橋の如くに自然と藥とり
巻きよせてもしくはとくとくハツ橋もと
とくふ

椿手 （雜録或説に藥ノ散ラヌトヒ忘とあり
子細くふくず藥のちくめと云事ヲ又椿の
灰にて製をもくも云

茶道雑録に或説に藁の散うゝと云心とあり

鄭葦手

春慶と此る品々あり

春慶ハ藤四郎入道てゝの名なり

油虫手

あぶゝ虫の色み藁の似たる故と云田舎にて

五器虫と云ものあり

一筋頽手

薄黒色にて一筋流のごとくの也大方は一筋

流あるゆゑ依て云

櫛粉木とも

宇治橋手

飴藁の色に藁たるんあり

櫛糊木手

底を丸くつくゝ様たる故也丸底なども云

胴塚手

胴ミメ手

胴張なる故不作物也胴ミメも胴塚に同

〳〵云

柿手

平かきさゝ様なる依て云肩丸く下もほ

りの形を木練柿と云又胴ゝ張る所
かさのたりゝに似たるを以てゝ云又餓鬼
腹とも云頸細く胴ゝて張りたるなり

藤浪手　此茶入遠州公歌アリ　評林ノ舟十リ
地藥濃紫の様にて流あり
厚手
根板茶入又厚くの薄くゝ云事あり
皆口手
口廣きものなり底丸ゝ

雅録ニ吹屋竈ノ中作

耳付手
笹耳とも云古薩摩ニ此耳多ゝ
瀬戸ハ利休焼鳴海手織部焼ゝ多ゝ
又唐物嶋物ゝ耳ゝ習ひゝ太き紙
撚のゝゝあるを付る夫ゝ耳丸と云笹耳等
耳をひらめゝて笹の形ゝゝ作るを云
達磨手
珠數の粒ゝ似たるゝ依て云事板谷物も
あり
棒の先手

蒔ひ指の先を打切たる形有云古瀬戸に有り
めづら〳〵

思川手

春慶に似たるもの也

底面手

同上底の面を取るもの也 金氣まるまるの
如し

清水手

音羽手を下に見るいふ事なり 銘
藥にまぎらんなり

袴ぬき手

腰〳〵下藥なり 本まるまるかたり

裸焼手

上藥なく下藥のみ也

撮底手 雜録に東土茶入の底を丸くつくり初たるを云又はまるく底
底に指の形あり 底を細く拵たるをとふと

山の神手

底に圓窓あり 是は茶入窯初焼の時此形
を拵て山の神に備つたる器物也必す異
風物なり

俵屋窯（雑録ニアリ）

利休時代尾州ニ在リ又米一ニ云俵窯の作ニ云

在中菴

堺の在中菴ニ云寺ニ在リ[illegible]ニ依テ云

大海舟海

大槃ニハ口の紐真秋水々ニ廣きを海ニ喩ヘ又口の小きを舟海ニ云入海のさゝろむり

希元名道元後亜相通忠子入宋メ長翁如淨ノ法嗣トナル越前永平寺開山建久五年寂一云長翁ノ嗣

昔ハ茶子の茶入肩衝等ニ大海ヲ添ヘ置キ茶臼ヨリ先ヅ大海ニ茶ヲ移シテ後茶入ニ入シ十リ利休居士意ニ大海ヲ曳溜ニ用ヒテハ焼物ト焼物ナレバコノマシ非ヅト曳溜ニハ塗物ヲ用ヒタルヨシ且亦ふるくは大海ヲ廣間書院ノ臺子ニハ餘リヲキシ[illegible]モ有ト云

茶道釜蹄茶入和物之部ニ　古瀬戸之事

藤四郎入唐前ニ古瀬戸ニ云○口兀手○厚手

○堀出シ手（雑録ニ往古瀬戸赤澤窯ニテ焼所アルヲ山谷ハステ然ル後堀ヲ云）

此三品ニ限ル皆瓶子也後道元禅師入唐の節

佛法禪師ト号ス建長五年八月廿八日寂年五十四
○加藤四郎左門道元禪師ニ從フ入唐スベシ藤四郎ト云上下ヲ畧シテ斯ノ云

隨而渡唐ニ底ヲ下ヲ〳〵ヲ焼事ヲ學ビ来ル事
ロ〻藥ヲ掛リ相モ能ク出来ル也入唐マテハ焼様ノ
鍛錬モ無ク口ヲ下ニシテ焼ミ故ニ其口ヲ忘テ藥モカヽ
ラズ相モ悪ク手厚ク不束ナリ藤四郎トハ加藤四
郎右衛門ヲ畧シテ云也○元来ハ栄西禪師唐ヨリ
茶ヲ持帰リ鎌倉實朝公ヘ（頼朝ヨリ三代目ニテ頼家男）献ゼラレ
シニ頭痛平愈シ玉ヒシ故諸家ヘ茶ヲ分チ給フ其茶
ノ入物ニ焼キメルガ始リ也茶入ニ大小アルハ茶ヲ分
ツニ親疎アル故也

古瀬戸名物之分

筒井　石さ池　中川　山ノ内
松前　ろ〳〵坊　松井　鑓ノ鞘
釣舟　東中庵　相坂　島山
胴高　破彼（ヤブレヌマ）　鮟鱇　鈴木
吉光　淺野　平野　福島
六條肩衝　淡雪
平手　山の井　可中
以上

小瀬戸　是ハ大窯の手　小竈のもと云事也
藤四郎入唐後ヲ唐物ト云説アレドモ疑ハシ

春慶　春慶ハ藤四郎入道ノ作ノ名ナリ

口瓢畳　夏山　擂茶　朝日　煎餅手

茶道雑録ニ

口瓦手　瀬戸藤四郎根本也後ニ越前永平寺

道元和尚渡唐の時同船シテ渡リ唐土焼様ヲ得テ

二重窯ニテ焼たるハ多和ニテ美也

順徳院天皇（御十四世）建暦年中也　土浅黄色濃薄ハ

茶入ニいたル　土細カナリ

古瀬戸　肩衝　丸壺　尻膨（ツボ　ナリ）　茄子　瓢タン

内海　手瓶　耳付　等大きなるハ稀

なり　寛永の頃マテ凡三百年茶ニテ焼たる

ハ唐物ニ云　筑又尾州瀬戸瓶子窯ニテ

焼ニも云

石蕾云此雑録古瀬戸ト云ハ不分明也茶道釜鶴茶入

の部　唐物の茶入ニ曰

唐物　往古々唐物のミを用ひ其内茄子を上品とも

肩衝文林是ニ次ク此三品を盆點ニ用ひ

其後品々ハ　故丸肩衝まくに用ひ

肩衝　名物記ニ出ルハ数三十餘もあり

松屋肩衝ハ別に詳世ノ名高ク　ある人も疑かく

江浦

九十九髪（ツクモカミ）

古今ふ百歳に一せたらぬ九十九髪とあり 百の字の一をとれば白の字なり 九十九髪ハ白髪のかく〳〵言るなり

又ツクモ茶入ハ肩テ日

塗物師 藤重ハ姓名藤巌ト云 利休時代也 塗物ハ兼ル歟

（ぎ事あり）其外高貴の二カ々

（ぎ事あり）品々ハ稀なる事 稀

松屋（古川源三郎ニ土門ト出タリ）所持の茶入半肩衝也 又志野

宗温が半肩衝迎名物あり

茄子 昔より貴覧不浅格別なり

ツクモ 似 松本 円座 出雲 小茄子

富士 紹珍 北野 國司

是等茄子の名物なり 尻張と茄子と形混ず

易〳〵 肩の丸きを茄子肩のツキたるハ尻張

文林 名物 博多ツクモ ―次― 文林ハ林檎ノ形ニ似タリ

ツクモの茶入を聚ふ名物 今ハ為きの茶入なり

二代目より市蔵と成る子孫今ハ在り

雑録曰文茄トハ文林又茄子ニ非ズ 利休ノ云ル名付給フ 法ニ出テタリ 針屋宗春ガ所持 ナリト或佐久間 不閑ノ所ヲ名トモ不閑ハ不平ナラン

仕ル名人なり 孔世後 名品の張ひ 貴

博多 桃 玉垣 鳥井 笹屋 紫室

本能寺 丸屋

是等文林の名物也

名物唐物の茶入数多くあれども大ぶた

右三品（茄子肩ツキ文リン）なり

文茄 名物記ニ小出伊勢守殿御所持ブンナとあり

（二万六千七百十石余 在所丹波國船井郡園部）

丸壺 利休 金木林 立花 寺沢

尻張 大尻張 利休尻張

大海 内海 鶴首 柿 達ア 鮒（フコ） 籬

物相　利休所持ナリ

水葉猿　利休百會ニ用トラレ茶ノタリ
高サ一寸八分　胴二寸　口八分四重　底一寸

右木葉猿ハ箱の裏ニ木葉猿の蒔絵ニ仙臺屋ニ
所望ニ成ル

廣口　飯銅　瓶子　樽　耳付　累坐

甎覃　上杉紀州御物　角木　駝蹄　常陸帯

鮫鰊　胴高　油滴　水滴　手瓶　弦付

右交茄子　唐物のツキ〻釜蹄ニ出ラタリ

瀬戸藤四郎　真中古　二代目藤四郎（九系切　本系切）

貯（チヨ）盛（モル）積ツム　収ヲサム　藏カクス　多クラ

雑録ニ奥州金花山ノ梵麗ノナマコ黄色ニテ青薬ノミタレ

楊姫　野田　大瓶　小川　思ひ川　面取　不面取

大覚寺　柿藤四郎　貯（モル）月　糸切　藤四郎　底面

花藤四郎　此花藤四郎の焼茶道雑録ニ口の廻りニ菓の蒔絵
或ハ梅鉢笹の蒔ふるとも云　地黒濃き柿　上黒
飴黄交ル

蝋燭ル　藤四郎春慶　塞（コミキ）　メ切

金花山　中古物　三代目（糸切円上）

大津　飛多川　玉柏　二見　瀧浪青江手

生海苔　藤浪（黄瀬）　盤（ハン）余野（ノウ）　真如堂

雜録ニ黄薬手真中古ト有

雜録ニ几手元斗ニそゝ〻ゝきと云心利休ゟ以ア何代

雜録ニ利休好ラ焼〻れ也織部同上

雜録ニ伊勢手春慶ト有伊勢尾張ノ境ニテ焼トアリ

廣沢

破風窯　四代目藤四郎薬溜り破風窯（多切月上

皆の川　音羽　翁　市場　廣口

渋紙のツマミ底　櫨形木　黄薬物　橋立

几　玉川　正木　米一　胴メ　櫨茶

正信春慶　堺春慶　後時代春慶

吉野春慶

後竈　四代目より後と後窯と云（多切月上

坊主ゟ　山道　姉　利休　鳴海

織部　捻貫　八ツ橋　伊勢ゟ

本朝陶器攷証ニモ源十郎ト有

雜録ニ源十郎ト有利休時代月時代古瀬戸偽ものゝ古瀬戸ト云

雜録ニ一万右三門焼是ハ唐物偽（贋同）物を焼〻リ京柿馬場三條下ル宝十リ不宜品ナリトアリ

京作の部

京作の事明詳次ニ云

・宗伯　・正意　眼醫　・茶臼屋名小兵衛

此右三人紹鷗時代也

源三郎　・新兵衛　浦井氏　・江存　・茂右衛門

・吉兵衛別所氏千氏不審庵所持名面箱

・萬右衛門　遠州公の家ノ人千不審庵所持也

此二人利休時代但〻此ゟの茶ハ無事庵ゟ所持ス

一説ニ後代の後の代ゟ云詳中茶ハの部ニあり

糸月藤四郎

虫喰藤四郎

真中古二代目ニそゝり　此手雜録ニ在り

黄薬手　雑録に真中古トあり　破瓦窯に黄薬物アリ

朝日春慶　雑録に日藤四郎法名春慶と云一ト説美濃国朝日と云地にて焼たりと云

堺春慶　雑録に出テメリ利休時代に和泉の堺にて焼たりと云説也　実ハ美濃尾張境目にその窯ハ

堺春慶四代目に在り

金氣春慶　雑録に是ハ薬ヲ云錆鉛色の様に見ゆる

却舎手春慶　雑録に是ハ心のもの程見事と云説

瀬戸春慶　雑録に是ハ瀬戸竈朝日出の作者なるべし

ゆゑに云四代目の七兵衛のこと歟ハいろ〳〵此説を云久しとのう

正意初メハ堺也京都に登り室町四条下処ニテ眼科を業とし又浦戸へ下りて茶入を焼也

浦井氏ト云

時雨　雑録に大鶴小霍と二ツを製薬ヲ集（堺薬）時雨ト改

内黄色手　雑録に中古物とあり

正意ヲ　京都の眼科医の瀬戸ニ下り茶入を焼たり

雑録に出てたり

新兵衛ヲ　雑録に京三條瀬戸物町瀬戸へ下り茶入焼たり

茲ニ石芳云　遠州時代陶工に非ス茶入ヲ能ク造ル

新兵衛　三條高倉に住ス唐物屋糸割符　有来氏

京三條通高倉瀬戸物町に唐物商賣ヲ家業とす尾州瀬戸へ下り茶入を焼習ひ名人と成上物なり遠州

慶時代の人なり　三條通り柳ノ馬場東ハ入南側に住居
今枝浦三右ヱ門居宅の所也茶入れと焼中古名物角
いろ〳〵あり　金景樂黒景黄樂景あり　絹上るべく
作はいろ〳〵あり　信樂　伊賀　備前窯ゆゑ造り
て焼なり　作茶矢筈ゝゝ作の物ハ新兵衛作ゝ
茶入れと水指の外ハ無〳〵　手強き作の面白き也
新兵衛焼遠州好代陶工に非ず茶入れと絵く造る
茶入れの底に自分の印に箆先にて新の字を彫り
又文字の多き物もあり　瀬戸信樂　丹波焼
なりの物なり　此新兵衛といふ人は陶工の職人に